

(米國の章を見よ)

一三、アルデーシエビスコース人造絹絲會社

*Société Ardechoise pour la fabrication de la soie Viscose.*

資金二百六拾萬法を以て創設せられビスコース式に依り人造絹絲を製造す。當社一九一九年の利益は一九九三・九六〇法にして一株につき三六・九五法の配當をなし工場はアルデーシエ(Ardèche)にあり、尙一九二一年の利益は一・三七五・二一一法にして百法の一株に對し六二法の配當をなせり。

一四、佛國ボルビスク會社

*French Borvisk Co.*

*Continental Borvisk Co.*

有名なる佛米合辦會社にしてストラルブルグ(Strasbourg)なる造兵廠の建物を買収し人造絹絲工場を建設し又更に獨國ハルツ(Harz)在なるヘルツメルグ(Herzberg)に人造絹絲製造工場を建設せり、兩工場共にビスコース法に依り操業す。當社の社長なるポリチコウスキー氏(B. Borzykowski)は米國コロンビア大學に木

質及びバルブ研究所を有し且ツルシヨウ大學に木材化學の講座を有す。

一四、セリカ會社

*Serica Co.*

當社の後援に依り一新人造絹絲會社創設せられ主にスターン氏法に依りビスコース絹絲を製造する筈にして額面百法の株式一萬八千株即ち百八拾萬法の資金を以て操業し工場はエコージス(Ecauzine)に建て機械は全部白耳義より購入せるものなり。

一五、里昂化學シャツペ製造會社

*Société la sechappe Chimique, Lyon.*

人造絹絲のシャツペを製造する會社にしてギラルド氏(P. Girard)當社の技術主任たり。

一六、ロイデアセタ絹絲製造會社

*Société pour la fabrication de la soie Rhodiaseta.*

資金三百萬法(一千法の株三千株全額拂込)を以て一九二二年七月ロース化學工

業會社 (Société chimique des Usines du Rhône) が主となりて創立せられたるものにして醋酸纖維素法に依り操業す。

同社は其所有する下記の特権其他を全部當會社に譲渡せり。

- 一、醋酸纖維素法に依り作らるゝ人造絹絲及び之れに類する物品(フィルム其他)の製造に關してローム會社の有する特許權又は秘密の方法及び將來に於て得らる可き特許權並びに方法等。
- 現在所有する特許權次の如し。

Fr. P. No. 437,240. 473,399. addition 20,072. au 473,399. addition 22,587. au 473,399. 477,620. 476,496; D. R. P. Nr. 258,879.; Canad. P. No. 139,046; U. S. P. No. 1,030,311. 1,258,913. 1,286,025. 1,389,250. 1,216,462. 1,191,439; Br. P. No. 25,893/11. 13,696/14. addition 8,046/15. to 13,696/14. addition 146,092 to 13,696/14. 7,773/15. 10,822/15; Swiss P. No. 59,412. 68,596. addition 71,991. au. 68,996. 71,695. 77,663.

- 二、ルーシロン (Roussillon (Isere)) の工場に用ふるゝ同一の醋酸纖維素絹絲の製法。
- 三、醋酸纖維素絹絲を染色する次の特許方法。

Fr. P. No. 512,649; D. R. P. Nr. 350,920; U. S. P. No. 1,366,023; Br. P. No. 150,989; Swiss P. No. 90,096.

- 四、上記發明に關しローム社が得たる人造絹絲に關する特許、改良、其他方法。  
ロディアセタ社は醋酸纖維素製造に關し將來發明したる場合其方法及び改良等をローム社に詳報す可く又此方面に關して取りたる特許、發明、改良等の諸權利の使用をローム社に許す可し。

- 五、醋酸纖維素人造絹絲及び之れに類似の製品及び用途に關する研究結果、設計及び企劃等。

新會社は滿期迄年金及び特許の諸經費を支拂ふ可し。

ローム社は新會社の要求に依り新會社又は上記諸權利を譲渡されたる個人又は會社團體の爲に上記特許及び諸方法の使用、併びに機械、裝置等の据付に關し技術上滿全の援助を與ふ可し。

上記契約の締結と共にローム社は其特許權其他の出資として七五萬法の株式を得たり。

而して當社本部は巴里市シエアングーション (Jean-Goujon) 通り一に置き理事として左の諸氏就任せり。

Nicolas Grillet (技術家にしてローヌ社の總理事なり) R. Aynard (諸會社の理事をなせり) E. Sisley (化學技術家) L. Willard (工業家) F. Neuville (工業家) A. Lan (商業家)。

以上述べたる外ラメル氏 (J. D. Ramel) に依り資金五拾萬弗を以て創立せられ未だ製品の市場に出でざるもの或は一日五百疋生産の予定にて資金二拾萬弗を以て創立し工場をニボンヌ (Nivonne) に建てたるものあり其他工場設立企劃中のものもあれど全計劃の公表を見ざれば之れが詳細を記す能はず。

此國に於て人造絹絲の販賣及び輸出入をなす主なる商會次の如し。

1. Chabrieres, Morel & Cie. Lyon-Marseille.
2. Eug. Archambaud & Fils. Aubenas (Ardèche)
3. Vve Guerin & Fils. Lyon, Saint, Etienne-Beyrouth.

白耳義チュービッツ人造絹絲會社製品一手販賣店にして紐育、美蘭、巴里に支店あり。

4. May & Cie. Saint-Etienne et Lyon.
  5. Textiles Lyonnaise Co. Lyon.
  6. Enrique Durán. Barcelona Mallorca, 303.
- 次に此國人造絹絲製造用機械業者を擧ぐれば
1. Salomon Colombier. Privas (Ardèche)
  2. A. Faugeirol & Cie. Les Ollieres (Ardèche)
  3. Victor Pain. Valence-Sur-Rhône.

西 蘭 佛



最近人造絹絲工業概況

【地圖解説】

佛 國

- (1) アザンソン || アザンソン、シャルドンネ絹絲會社本工場
- (2) リオン ||
- 里昂人造絹絲會社工場
- 里昂セルローズ製造會社工場
- アルバートゲツテウバデザイン商會工場
- 里昂化學シャツ製造會社工場
- (3) ザペー || ザペー人造絹絲會社工場
- (4) イヂュー ||
- イヂュー人造絹絲會社工場
- ザペー人造絹絲會社分工場
- (5) 巴里 || 巴里人造絹絲製造會社工場
- (6) テイーベ || 近在カルケラバタイユに巴里ビスコース人造絹絲會社工場
- (7) アルデーシエ || アルデーシエ、ビスコース人造絹絲會社工場
- (8) ストラスブルグ || 佛國ホルビスク會社工場

### 第三章 白耳義

戦前世界中最も殷盛なりし此國は佛獨二國の間に介在し殊に佛國の感化を受くる事大にして國民性又佛に類する所多し、白耳義は一八三一年列強に依りて其獨立を承認せられ同時に永久中立國として中立の永久性及び領土の不可侵を保證され國民は晏如として其業に勵み國家の前途洋々たりしも一九一四年六月二拾八日巴爾幹半島の一角サラエボに於ける事變は全世界を戦亂の渦中に投じ獨逸國は其宰相ベートマンホルツエツヒ氏の「必要は法律を知らず」の言の下に遂にリエージュ攻撃を白國侵入の第一日として漸次其歩を進めアントワープの陥落を以て全白國を我物となし白國人をして他力の終に頼む能はざるを痛切に感せしめたり斯くて國內の騒亂言語に絶し人命の保護すら不安の極にある今日耕地工場等の荒廢を思慮するを得ざらしめ其蹂躪に任せたり。

然れども弱者を助くるは之れ人情の然らしむる所列國の同情翕然として此國に集り獨軍を掃盪し聯合軍の優勢と獨軍の困憊は遂に一九一八年十一月十一日

午前五時斯のコンピエーヌの森に於ける休戦條約の調印となり未曾有の大戦は茲に漸く終りを告げたり。

休戦の約成ると共に政府は其復舊に全力を盡し英米等の助力に依りて荒廢見る能はざりし狀勢を着々恢復し其進歩意外に速かなりき、殊に人造絹絲工場の復舊は不思議の一と迄稱せらるゝ程に迅速にして戦前四工場ありしものゝ中一九一九年七月に其一工場が製造を再始し同年末には殘三工場共に操業を開始し得る運びに到り一九一三年に於ける人造絹絲工業の従業者は六千名を算せしが一九二〇年三月頃には約五千四百名の就業者を見即ち九割の人が再び使用せられ其勤務時間も八時間労働制の制定を見るに到り其生産額の如き一九一四年には二百七拾萬疋なりしもの一九一九年には其約三二%を産し翌一九二〇年には六八%を生産する程度に迄進めり。

此國に於ける人造絹絲工場は主として硝化綿法に依り操業し政府は最近此等人造絹絲業者の要求に依り其原料の一部たる酒精の價格を一立突につき一・五〇法より一・一八法に下げる爲に人造絹絲の生産費は一疋當三・五〇法の低減を見た

り。

又最近の報道に依れば此國一製造業者は日本に工場を建設し人造絹絲を輸入して安き生産費を以て織物を作らんと企劃せる者あるが如く又白國製品が佛國に入りては關稅等の關係より其價額約五割高價となるが故に最近白國人に依り佛國に一大人造絹絲工場建設の計劃中なりと聞く。

### 一、チュービッツ人造絹絲會社

*Société de la soie artificielle de Tubize, Société anonyme.*

一八九〇年に資金百三拾萬法を以て創立せられ硝化綿法に依り操業し一日千六百疋を製造し資金は其後四百萬法に増したりしが一九二一年更に二千萬法に増資せり、佛國ブザンソンなるシャルドンネ會社及び獨國聯合人造絹絲會社と共に人造絹絲工場の最初のものにして其主要工場は首都ブラッセル(Brussel)を去る拾五哩の地チュービッツ(Tubize)にあり(斯のウォーターロー Waterloo の古戰場よりも約拾五哩なり)。

當社の製品は甚だ優良の評あり常に其市價他の製品より平均一疋につき一法

位高價なりしが故に前記シャルドンネ會社及び聯合人造絹絲會社が硝化綿法操業の爲め無配當となりし時も不況の影響を受くる事少く尙昔日の如き盛況を持續せし事次の數字の如し。

年次 總利益(法) 配當率%

一九〇七 一九二・三・七六五 四五

一九〇九 三・三一五・〇〇 五〇

未曾有の戰渦斂るや當社は直ちに其復舊工事に着手し一九一九年七月此國に於ける他工場に先ちて操業を再開し同年度米國へ輸出せる高一萬封度を越へ翌一九二〇年六月頃には毎週米國への輸出高二二五〇〇〇封度(百箱)に達し(一九一三年—一四年間米國へ三百萬封度を送り)現下五千名の従業者を使用し(其中八割は女工にして紡絲撚絲に従事)一日約四五〇〇〇疋を生産す。  
今次に當社戦後の營業狀態を示さん。

年次	純利益(法)	
	特權株	普通株
一九一九	四・一七八・二六四	

尙當社は外國に分工場又は姉妹會社を有し現時パウドリ氏(M. de Paudry d'Asson)社長として總てを統轄し就中米國に於ける工場は其最も有名なるものにして硝化綿法に依るも時勢の推移はビスコース法の遙かに優秀なるを實證せる結果白國なる本社は漸次之れに改變せんとしつゝあり。

二、リントマイヤー人造絹絲會社

Société Linkmeyer in Brüssel.

Société anonyme de soie artificielles de Hal.

リントマイヤーシューレ(Linkmeyer-Thiele)法に依り工場をハル(Hal)に建て酸化銅アンモニア式人造絹絲を製造し一九〇七年一七二二〇法の損失をなし經營困難となり其組織を改めハル人造絹絲會社(Société anonyme de soie artificielle de Hal)と改稱し其興隆に苦辛せしも遂に解散の止むなきに到れり。

三、ビスコース人造絹絲會社

Société générale de soie artificielle par le procédé à la viscosse.

此國唯一のビスコース會社にして其工場はアロス (Alors) 及びルイスブレーク (Ruybroeck) にあり。

當社一九二〇年後の收利下表の如し。

年次	純利益(法)	
	特權株	普通株
一九二〇	六・一五七・二一四	
一九二一	四・五五八・四〇〇	四〇・五〇〇
		三七一三

四、オーアルグ人造絹絲製造會社

Société de la fabrique de soie artificielle d'Obourg. Société anonyme.

資本金二拾萬弗を以て創立せられ硝化綿法に依り一日五百疋を産せしが大戰の爲に工場の殆んど全部を破壊せられ其損害約二百五拾萬法と算せらる。

戰前當社經營の總監督理者たりしデニス氏 (M. Denis) はモンヌ (mons) に於ても小規模工場を建設し硝化綿法に依り操業したりしも大戰に際し獨軍の來襲に遭ひ獨軍は其全部を破壊せり而して氏は戰後友人等と共に投資し氏の發明せる方法

に依り操業する工場を約四一五〇エーカーの地に鐵筋混凝土の最近型に建設し此處にて七〇一五〇デニールの人造絹絲を製造す。

當社戦後の營業狀態下の如し。

年次	純利益(法)
一九一九	一四二・七五九
一九二〇	九八・三二七
一九二一	五六・二〇〇

當會社は其資金を倍大してビスコース法に依る工場を建設する豫定なりしが此工場は當社より獨立せしめて經營する事となり一九二〇年初夏の候纖維製造會社 (Société Les Textiles) の構成を見るに到り工場を同じくオーブルグに設けたり。

五、纖維製造會社

Société Les Textiles. Obourg.

一九二〇年前記(四)會社の企業主等に依り創立せられビスコース法に依り操業する筈にして工場の設計(建築及び機械共)及び其裝備は最新式のものにして其經



*A August*

最近人造絹絲工業概説

營は(四)會社と同一の人士に依りて爲さる。

第四章 伊太利

伊太利は歐洲二大産絹國の一にして佛の蠶絲業日々振はずなり行くに引きかへ此國の夫れは盛大の狀勢を示し其位置地中海に面し風光の明媚なると共に其名高し。

眞物の存する所偽物の之れに伴ふ事影の形に添ふが如く蠶絹絲を産する此國は人造絹絲に就きても相當の産額を出す然れども此國人造絹絲業の興隆は後年の事にして一九〇五年頃最初の工場の建設を見自國産蠶絹絲の影響を受け需要未だ盛ならず其發達獨佛等に比し遙かに遅れたり。

而して現下之れが原料たる木材バルブは諾威國より供給せられ其製品の多くは自國に於て消費せられ殘額は米佛等に行く此國人造絹絲集散の中心地は蠶絹絲の夫れと同じくロムバデー(Lombardy)の美蘭市にして製造工場の所在地は又北部地方なりしも最近ナポリ及び羅馬にも新工場建てられたり。

*Lombardy*  
*Lombardy*

第四章 伊太利

次に戦前此國に於ける人造絹絲の輸出入統計を掲げん。

年次	輸 入		輸 出	
	數量(疋)	金額(リラ)	數量(疋)	金額(リラ)
一九〇五	三・六三三	七二・六二四		
一九〇六	二〇・九七六	五九・六三〇		
一九〇七	三六・二四	八七・九七四	五・八一〇	一四九・九二六
一九〇八	四一・〇〇九	六二・六六八	二〇・〇六	三三・五九〇
一九〇九	六九・九〇三	一〇五・〇七七	八七・七二	一・三二七・二六三
一九一〇	二二・六〇六	三・二七・三六	八九・三六	一・三五一・三〇四
戦後此國への人造絹絲輸入高は(單位疋)				
年次	染色せるもの		染色せざるもの	
一九一九	六四〇		七八〇・二四	
一九二〇	三六六・二		三七〇・四五八	
一九二一(上半期)	五三〇・八		一三三・三三二	
同(下半年期)	(兩者)	一一六・二七六		

133,372  
5,708  
116,276  
254,976

最近人造絹絲工業概説

にして右輸入額を其主要原産地別に表示せば次の如し(單位疋)

白耳義	一九一九年	一九二〇年	一九二一年上半期
瑞 西	四八七三二	三三二四一三	五一六四七
佛 國	二九八八九二	三五二八五	五二一三七
米 國		五六〇	五三
			二九〇三〇

又此國人造絹絲の輸出高は(單位疋)

年次	染色せるもの	染色せざるもの
一九一九	一六〇七一	二一四三六二
一九二〇	二一五七〇	三六四七九四
一九二一(上半期)	一一五九七	三七六五二七
同 (下半期)	(兩者)	五一七九四六

にして其主要仕向先は(單位疋)

11,597  
376,529  
517,946  
906,070

第四章 伊太利

米 國	一九一九年	一九二〇年	一九二一年上半期
白耳義	六三六八二	一〇八六〇九	一七三・八七六
佛蘭西	四一〇〇九	一・三三二	一六四八二
英 國	二・三〇四一	三〇四二〇	二・三三一
西班牙	一四・二六一	二八・八五八	二・四三〇
瑞 西	六九・八一五	一八・七三一	四三・一四九
埃太利	一・七六四	五・一七九	二・三五三二
			三三・八三七

上掲輸出入兩統計を對比考察し更に戦前の夫れと比較し尙一九一三年には輸入の輸出に超過せし量二八萬疋なりしを思へば茲に此國人造絹絲の生産量及び使用量の詳細を表示する事能はざれど其發達の甚だ速かにして斯業隆盛の異常なるを知る事を得可し。

現下此國に於て人造絹絲に投資せる資金は約四拾二億萬理にして一九二三年には此れの二倍となる可く従業員も約一萬二千人なれども一九二三年の終り迄

には二萬人となる筈にして此擴張に依りビスコース絹絲一日産額一萬一千疋が一九二三年末には二萬四千疋を生産するに到る可し。

此國蠶絲業者は自己の營業範圍を侵害せらるゝを恐れて人造絹絲の輸入及び此國に於ける人造絹絲業の發達に大に壓迫を加へ尙絹絲なる名稱の下に人造絹絲の販賣をなさざる様強硬なる請願を政府になしたるやに聞く然れども人造絹絲の發達は世の趨勢の然らしむる所にして其品質蠶絹絲に比し遙かに劣り未だ蠶絹絲の代用品として完全に近き應用をなし得ざるのみならず絹絲の需要は日々増大し全世界に産する蠶絹絲の産額は之れに應ずるを得ず殊に交通未だ自由ならざる往昔は知らず四海比隣世界の財界は共通一如にして一國の變化は直ちに他國に影響を及ぼす如き今日伊太利のみ之れが圏外に出でん事能ふ可くもあらず然れば其壓迫はよし自國のみに於ては可能とするも他國の推移を如何とする能はず時世の流れは遂に圏外に出でしものをも巻き込み行く事必定にして伊國蠶絲業者が此等の理を解せざる如き没分漢にはあらざる可く著者は此風説を信するを得ず。

### 一、パビアビスコース人造絹絲會社

*Societa artificielle della viscosa di Pavia.*

初め硝化綿法に依り操業し一九〇五年の創立にかゝるものにして伊國人造絹絲工場中最初のものなり、資金二四〇萬理を以て操業を開始し年額十萬疋を産せしも一九〇七年更に二五〇萬理に増資し後年ビスコース法の有利となるや全部之れに改め名稱もビスコース會社以前はパビヤ人造絹絲會社と改稱せり。

### 二、伊太利ビスコース人造絹絲會社

*Societa Unione Italiana de la viscosa, Torino.*

資金二五〇萬理を以て創立し一日約五百疋を産し工場をトリノ(Torino 英稱 Turin)及びベナリア(Venaria)に建設せしが其後工場を擴張して一九二一年春頃にはトリノ工場のみならず従業者一萬人を使用せりと云ふ。

### 三、伊太利人造絹絲會社

*Societa Italiana seta artificiale, Milano.*

資金三百萬理を以て創立しビスコース法に依り操業す。

四、スニア會社

Societa "SNIA", Torino,

トレニヤギー氏(G. Tregnaghi)の經營にかゝるものにしてスニア(SNIA)を以て Societa di Navigazione Italomericana (伊米郵船會社)の各頭字を取りて之れを略稱としたるものにして上記(一)(二)(三)なる三會社四工場は此社の統轄する所なり、一九二〇年夏頃當社は更に増資をなし「トリノ」「ナポリ」「Napoli」英稱(Naple)オルバサノ(Orbasano)及びブラ(Bra)の四個所にビスコース法に依る新工場を建設し伊國人造絹絲業界に覇權を有す。

尙當社は此國海運界に重要位置を占むる商工郵船會社(Societa di Navigazione Industria et Commercio)を同一經營に依るものなり。

五、パドバ人造絹絲會社

Societa artificielle di Padova.

工場をパドバ(Padova 英稱 Padua)に設け硝化綿法に依り操業したりしも一九〇八年羅馬シネス會社に買收せられ近時ビスコース法に依り操業す。

六、シャチロン人造絹絲會社

Societa de la soie de Châtillon, Milano.

一九一八年末の創立にして、資金千五百萬理を以てビスコース法に依り操業し其工場はアオサ(Aosa)河に添へるシャチロン(Châtillon)及びベネチア(Venezia 英稱 Venice)にありて一九二〇年頃伊國人造絹絲總産額(一日約八千疋の中其四分の一即二千疋を産しベネチアの工場に於ては從業者一千人(中女工八百人)を使用し現下當社一日生産高約三千疋なり、最近ナポリ及び羅馬に分工場建設中にして一九二三年には完成の筈なれば其生産量倍大さるゝに到る可し。

拾二月參拾一日に終る一九二一年度當社利益金は一・四二六・六四二理にして同年度八%の配當をなせり。

當社製品の獨國殊にライン地方の一手販賣はポールカルピノ商會(Firma Paul Calvino, Elberfeld)が行ひ又大正九年我國三井物産會社が人造絹絲工場を我國に新設せんとして之れが機械及び特許權の購入交渉をなしたる事あるも協約成らずして中止せり。

# 白 耳 義



## 最近人造絹絲工業概況

### 【地圖解説】

#### 白耳義

- (1) チュービッツ || チュービッツ人造絹絲會社
- (2) アロス || ビスコース人造絹絲會社
- (3) ルイスブレイク || ビスコース人造絹絲會社
- (4) エコーシヌ || セリカ會社(佛國)
- (5) オーアルカ || オーアルカ人造絹絲製造會社

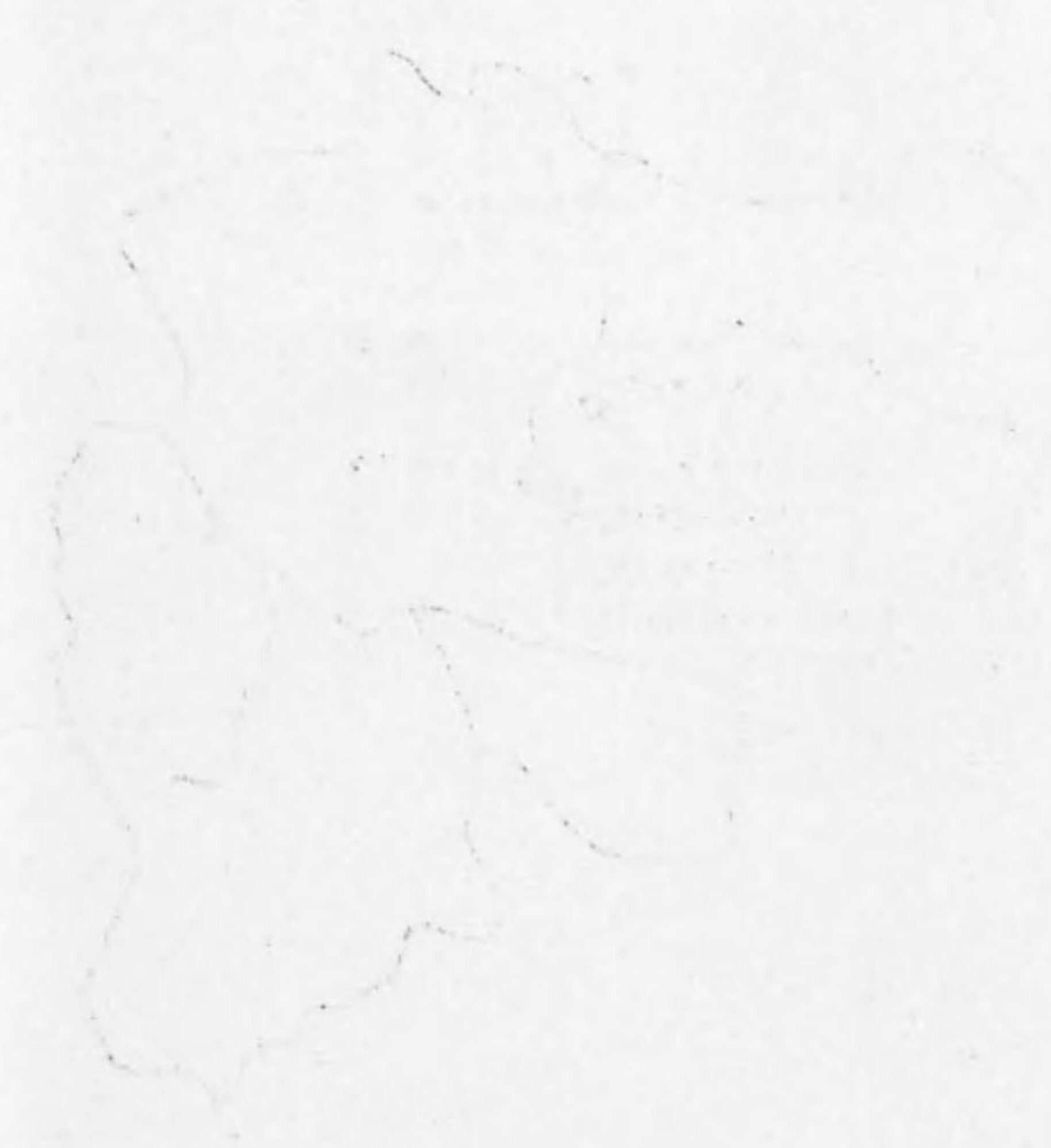
#### 伊太利

- (1) パビヤ || パビアビスコース人造絹絲會社
- (2) トリノ || 伊太利ビスコース人造絹絲會社
- || スニア會社
- (3) ミイラン || 伊太利ビスコース人造絹絲會社
- (4) ベニス || シヤチロン人造絹絲會社
- (5) ベナリヤ || 伊太利ビスコース人造絹絲會社
- (6) ナポリ || スニア會社
- (7) オルバサノ || スニア會社
- (8) アラ || スニア會社
- (9) シヤチロン || シヤチロン人造絹絲會社

利太伊



白 雲 集



### 第五章 太 利

#### 一、第一 埃國光澤絲製造會社

Erste Österreichische Glanzstoffabrik, A=G. St. Pölten.

一九〇四年資金二百五十萬クローネを以て創立し銅アンモニア法に依り操業し一九一一年頃四百萬クローネに増資せり、其増資前の利益狀態次表の如し。

年次	總利益(クローネ)	配當%
一九〇七	六四〇五〇八	一〇
一九〇九	四六四三七四	一〇

其後獨國聯合光澤絲製造會社の經營となり資金五千萬馬克となし收利漸く増加し戰後次の如き配當をなせり。

年次	配當%
一九一九	一〇
一九二〇	一五

一九二一

二〇

二、ビルズドルフ人造絹絲會社

Kunstseiden Fabrik, Vilsdorf.

ビスコース式に依り操業したりしも收支相償はず一九〇九年遂に破産せり。

第六章 洪牙利

一、第一洪牙利人造絹絲會社

Erste Ungarische Kunstseiden Paprik, Sárvár.

白耳義人の經營する所にして硝化綿法に依り人造絹絲を製造し一年約三五萬疋を産し漸次擴大して一日約七千封度を生産するに到りしも開戦と同時に塙人に依り占領せられ軍需品製造工場として使用せられたり然れば戦争に依りて破壊せらるゝ事少く爲に其復舊工事甚だ容易にして講和後數ヶ月にして操業を再開し現時は戦前と同じく一日約七千封度を算す然れど經營上の失敗は資金現在二百萬クローネなるに一九二二年六月に終る一年間の缺損金二百拾萬クローネ

を出せり。

二、洪牙利ビスコース人造絹絲會社

Société Hongroise de la Viscose.

ビスコース法に依り操業し一日約五百疋を生産す。

第七章 和蘭

一、和蘭人造絹絲製造會社

Neder Landsehe Kunstzjyde Fabrick. Arnhem.

一九一一年資金百萬ノロロンを以て創立しビスコース式人造絹絲を製造し工場をアルンネム(Arnhem)に建設し七百人を使用せしも一九二〇年の初めにエーツ(Ede)に約五萬平方米の地を購入し資本金も五百萬フロリンに増加し此地に分工場を建設し兩工場に於て現下約二千五百人を使用す。

當社製品は大部分米國に送らる。

二、和蘭人造絹絲工業會社



Hollandsche Kunstzide Industrie. N. V.

一九二〇年五百萬フロリンの資金を以て工場をブレダ (Breda) に建設しビスコース法に依り人造絹絲を製造す。

## 第八章 英國

此國に於ける人造絹絲業の發端は斯のスターン氏 (Stearn) に發し氏は世界的大發明家たる米のエヂソン氏と連絡あり、初め鹽化亞鉛式にて電球用炭素線を製造し倫敦に其工場を有したりしが斯のビスコースの發明さるゝや纖維素の鹽化亞鉛溶液の代りにビスコースを用ひ試験をなしたる結果一八九八年ビスコース紡絲法の特許を得氏は茲にビスコース紡絲「シンヂケート」(Viscose Spinning Syndicate) を組織し現英國纖維藥品製造會社化學主任なるブリッグス氏 (Briggs) を主任としキユウガードウン (Kewgarden) にて之れが製造の研究をなす事拾八ヶ月の後工業用として成巧し翌年此仕事を倫敦なるクロッス氏等の研究所に移し尙研究を續け一八九九年ビールド氏 (Beadle) は木材バルブを用ふる方木綿纖維より優れるを知り

其原料として木材バルブのみを用ふに到り其後工場規模の研究を重ね一九〇四年コートルド會社の設立を見るに到れり、此國斯業の隆興は「クロッス」「マバン」「ビールド」三氏のビスコースの發明に依り頓に盛大となりたるものにして其會社數甚だ少なれど世界最大の生産力を有する前記コートルド會社あり、其製造品は自國に於て消費せらるゝ事少く殆んど凡ては海外諸國に輸出し米國を其最一とし本邦へも頻りに輸入せらる。

「日没を見ず」と迄の豪語を放ち得る程に其領土地球上に散在し古き歴史と充實せる國力とは以て此國の前途を盤石の固き安穩に置き例令國內に愛蘭問題あり東方に印度問題ありと雖も歴代英邁なる皇帝を戴き相次いで出づる英傑の爲政其宜しきを得て今や大戰後の經營に營々たり、人或は保守老大的英國既に時潮の流れに置き去られんとし大戰以來世界一般に推移し來りたる人思想の悪化と所謂民族自決の高稱に依り峰起したりし各領土の紛亂は益々國狀の亂脈を惹起し加之大戰後疲弊の今日失業者簇出の上に歸還兵士の處理の困難あり、彼如何に強穴なりとは云へ遂に漸衰の兆現はると稱するあり、又世界財界の中心と嘔はれし

倫敦も其實權既に業に紐育に移り旭日昇天の勢にある米國は世界財界の覇權を英より奪へりとなすものあり然れども大戰五ヶ年苦難は英國に多大の影響を與へたらんも此艱難は國民の覺醒を促し歩武堂々老練なる國家經營の結果はやがて名實共に世界大國の體面を四海に誇示するに到る可く斯くて商工業の進展に海運に將た植民地の發展に益其大を加へ國家の前途洋々たるものならん。

茲に依て此國人造絹絲業の將來を考ふ時又發展の可能度甚だ大なるを見る即ち「コートールド」會社の如き生産費及び關稅の關係より既に米國に大分工場を所有し益之れが擴張に盡瘁し例令米國の需要其供約に依り充滿さるゝに到ると雖も尙濠洲あり印度あり亞弗利加あり況んや支那大陸に於て既に優秀の地歩を占むるに於てをや。

更に人造絹絲工業の一新興方法たる醋酸纖維素人造絹絲の製造を企劃せる英國纖維素藥品會社に對し政府は資金の方面に於て多大の補助を與へ之が事業の發展を圖れるあり官民共に一團となりて斯業の改發に力を盡す實に此國人造絹絲業將來の發展や刮目に値する又言を要せざる所なり。

一、コートールド人造絹絲會社

Courtauld & Co. Coventry.

一九〇四年の創立にして工場をコベントリー (Coventry) に建てビスコース法に依り操業し一九〇八年の頃は一年約三七五〇〇〇疋を産せり其後開戦と共に從來獨逸人の經營なりし斯の聯合光澤絹製造會社のプリント (Print) 分工場を所有し現在之れをも合して六工場あり其最大工場は三千人以上を使用す當社は從來一五〇デニールを主として製造せしも最近細絲の需要多きに鑑み最低七〇デニール迄の絲を製造し其單絲も八デニール位を普通とせしも五乃至六デニールの細さとなし現下一日約二万封度を生産す。

大戰前後の收利状態左表の如し

年次	利益金(磅)	配當%
一九〇八	四六・九六八	
一九一七	一・一七〇・八六三	
一九一八	一・一八四・九三八	

一九一九	二二八〇・八六一	三〇〇
一九二〇	一八〇四・七九六	一二・五
一九二一	一六八四・五九三	一一・三

一九二〇年豫備金より百五拾萬磅、一九一九年の收利より四九九・九九三磅を取り、其資本金を三倍にし尙豫備金へ五〇萬磅を加へ尙此増資は一九二〇年度の決算後に行ひたるものなれば上記配當率を増資前の資本金に換算せば一九二〇年度の配當は三六・三%に相當す。

増資前當社の資本金は四百萬磅にして増資に依りて得たる八百萬磅は全部之れを米國分工場に向けたり、(米國分工場の詳細は米國ビスコース會社の項を參照す可し)。

當社は初めコートールド氏 (George Courtald) とテトリイ氏 (Henry Greenwood Tetley) に依りて經營せられしものにして初め絹織物をのみ製造したりしが一九〇四年其組織を改め人造絹絲をも製造する事となりコートールドとテトリイ人造絹絲會社と稱せしも後改めてコートールド會社となしたり。

テトリイ氏はヨーク州よりクレップの製造に興味を持ち此社に來り數年間ビスコース法を操業して成巧せしものにして氏は此社の社長たると同時に大英國及び愛蘭の絹業協會長となり傍らクレップの製造を行ひたりしが約一千萬弗の資産を残し尙當社の重役たる前記コートールド氏も一六・七三三・四七五弗の財産を残せりと云ふ。

當社機械部主任はクレイトン氏 (Clayton) にして化學部主任はナッパー氏 (Napper) なり、氏の前任は斯の發明家にして篤學者たるウイルソン氏 (Leonard Philip Wilson) なりしが先年同氏の物故に依り之れに代りしものなり、當社は尙プリントに徒弟養成上科學教授をなす爲に設備十分なる實驗室をも建設の豫定なり。

## 二、英國光澤絲製造會社

British Glanzstoff-manufacturing Co. Ltd. Liverpool.

獨逸聯合光澤絲製造會社が資金十二萬五千磅を投じて其分工場として建設したるものにして工場をプリントに其營業所をリバープールに置き銅アンモニア法に依り操業し創立の當初は一年約二拾五萬疋を産せしも漸次増加し二千人の

従業者を使用し四拾萬疋を産するに到り一九一三年の如き三八%の配當をなしたり(資金七五〇萬馬克に對して)。

然れど上述の如く(一)の會社の所有となり銅アンモニア法を全廢しビスコース法に改められたり。

### 三、英國纖維素藥品製造會社

British Cellulose & Chemical manufacturing Co.

過ぐる世界の大戰は實に科學戰にして就中空中及び海底の戰は其最も新しき戰鬪法にして殊に空中戰は最も多忙を極め各國共に飛行機の製作に就きては最大の努力をなしたりしが英國の如きは戰時中非常に多數の飛行機を製造し之に用ふる塗料として從來護謨硝化綿溶液、カゼイン等ありしも此等は凡て欠點多く獨り醋酸纖維素が甚だ良好なりければ殆んど之のみを用ふるに到り飛行機製作數大となるに従ひ之が塗料製造に大工場の必要を感じ茲に瑞西化學者ドレーヌ兄弟を招聘して大工場を建て盛に之を製造せり、これ當社の起源にして戰後其用途減少せしかばセルロイド代用品を作り人造絹絲をも作る事となり其製造

研究に苦辛したるもセルロイド代用品は加工困難等の故に良結果を得られず爲に人造絹絲の製造のみを主眼となし今や之れに向つて着々其歩を進めつゝあり。當社は原料藥品たる無水醋酸等を自工場に於て作るが故に人造絹絲の外に之れに關連せる各種化學藥品即ち合成香料、「アスピリン」「カーバイド」等を製造し殊にカーバイド工場は英國第一にしてアスピリン工場は外國の供給より英國をして獨立せしめ得る程の生産力を有す。

當社の起源既述の如く政府との關係甚だ密接なるものあり、政府も當社の存續につき多大の援助を與ふるに決せしかば當社は政府より社債券を保證として一四五萬磅を借入れダービー(Derby)の近住スポンデン(Sponden)にある敷地三四〇エーカーの中二百エーカーの地を人造絹絲工場に當て三五〇萬磅を費して之れが工場を建設せり。

當社創立は一九一八年にして初め飛行機用布に用ふる纖維素濃液の發明者たるマードゥン氏(Col. Grant Marden, M. P.)が社長たりしが一九一九年度決算の結果は總損失二三七・七三九磅にして其損益勘定書を見るに眞の損失額は八五・〇〇七

磅にして之れを後期へ繰越し賣買損失八五・三九三磅、利子九六・八二一磅、一般經費五七・五二一、減價一・五九〇、雜收入三・五八七にして資産は六月三十日現在に於て六・五四三・二六〇磅、財産としては土地建物機械等三・二八六・九三八、豫備費三〇・四八一・四、特許權等一・八八四・六七八、貯藏品及び仕掛品並に原料二九六・〇九三、現金八一四・二四六磅なり。

又一九二〇年六月三十日に終る一期は約一二〇萬弗の損失を來し同年十二月九日の株主總會の席上社長マックゴワン(Sir Henry Mc Gowan)氏は「本年は不幸にして損失金を出したるも之れ本春投じたる大資金が未だ回收利用するに到らざるに依るものにして之れは主として人造絹絲製造の爲に費消し其人造絹絲工場は同盟罷業の爲に工事非常に遅れたるも目下着々進捗し居れば一日九噸の生産に對する諸準備は來春三月末迄には完成す可しと信ず、又製造上の機械的及び化學的困難は其後の研究に依りて之れを除くを得たれば今後人造絹絲を以て當社の主要生産となす考なり」と發表せり、斯くて一九二一年四月現在にては此社の資金七七五萬磅にして之れは優先株(一株一磅)四二五萬磅と普通株(一株一磅)三五〇萬

磅とより成り其重役には前記マックゴワン氏の他にバーチエノーフ(Sir Henry Birchough)チャムバートン(Arthur Chamberlain)ドゥソン(Sir Trevor Dawson)の諸氏就任し同年六月三十日に終る上半期決算の結果は總損失金七五・八四一五磅にして此中豫備費三〇・五〇九五、開業費一・二〇八六二、總負債一・〇九九三〇五、特許權及び得意先一・八八五〇〇〇、社債一六六・五〇〇磅にして資金は七七五萬磅なり、此負債を消却し且今後の操業資金の準備の爲に重役等は普通株の額面一磅を一〇志に(即株式資金を六百萬磅)減資せん事を發議し新に社債五〇萬磅を起す事に決し之れが支持會社を Cellulose Holdings & Investment Co., Ltd. と稱し一志の株一〇〇萬即五萬磅の資金を以て立てられ政府は之れに賛成し其優先株(一四五萬磅の半額を此社に渡せり)。

斯くの如く此社は其經營に政府の助力を得れども尙甚だ困難なる折柄一方ドレーフス(H. Dreyfus)氏は醋酸纖維素及び其人造絹絲に就き孜孜研究の結果數多の特許を得て氏の方法に依り一九二一年五月より人造絹絲の製造を初め一日一千封度を産し八月末には一噸を同年末には豫定額なる九噸を生産する筈にて營

營苦辛したりしも未だ之れに到らず又白耳義なるチュービッツ人造絹絲會社は醋酸絹絲の染色に就き十分研究し當社重役の意見を確めたる上新社債の一〇萬磅を引受け最も敏腕なる操業支配人を一名當社に貸し之れが經營に參與せしめ當社製品を海外に販賣する事に契約し獨逸國クラメルリンドンマイヤー染色會上會社(Färberei und Appretur Gesellschaft vorm A. Clavel und F. Lindemeyer)は二年以内の契約にてスボンデンなる當社工場の染色部を管理し幹部に列する事となれり。斯くて醋酸絹絲の應用上最も大なる難關とする染色工程は比較的容易となり、尙良く研究せらる可く強伸力の濕潤状態に於ても強大なる事は其用途益、擴大さるゝに到る可く殊に原料藥品の生産費安價にして得らるゝに到らば他の諸式を凌駕するに到る可し。

尙當社は米國に姉妹會社を有し此米國工場も醋酸絹絲の製造を企劃研究中なり。

#### 四、セルロ絹絲製造會社

United Cellulo silk spinners Co. Great Yarmouth.

一九〇七年資金二〇萬磅を以て創立せられ工場をグレートヤールマウスにて白耳義國リンクマイヤー人造絹絲會社の後身たるハル人造絹絲會社よりシール氏の特許權を購入し銅アンモニア法に依り操業を始めたるも製品一度も市場に出でずして經營困難の爲解散の止むなきに到れり。

#### 五、ワルストン人造絹絲會社

Walston artificial silk manufacturing Co.

硝化綿法に依り操業し工場はラグビー(Rugby)在にあり。

### 第九章 瑞 西

此國は其南及び西に歐洲二産絹國たる伊佛と隣接し北は獨逸に接してライン地方工業隆盛の一要因たるライン河の本源は此國に發し獨逸國とは特に密接の關係あり加之人造絹絲業發詳の地たるブザンソンは北アルプスの峻峯を越へて彼方の麓にあり此國人造絹絲工業の起れる又故なきにあらず而して其製品の殆んど全部は外國に輸出せられ自國に於て消費せらるゝ量甚だ少し。

次に此國人造絹絲に關する統計を掲げ斯業の大勢を示さん。

第一表 人造絹絲輸出入高

年次	輸		入	
	數量(疋)	金額(法)	數量(疋)	金額(法)
一九一八		一・九六〇・〇〇〇		
一九一九	五七・〇〇〇		二二・九〇〇	
一九二〇	三六・三〇〇	一七・六八二・〇〇〇	四九四・〇〇〇	
一九二一	八三・六〇〇	一八・一〇〇・〇〇〇	三四七・六〇〇	六・四〇五・〇〇〇

年次	一月以降六ヶ月間		一月以降九ヶ月間	
	輸入高	輸出高	輸入高	輸出高
一九一九	五四五		一・二四二	四・一六三
一九二〇	四・四〇八		四八四一	三・二五六
一九二一	五五一		一・七六七	五・八一四

第三表 仕向先國別人造絹絲輸出入高(單位法)

國	一九一九年	一九二〇年
米國	七〇〇〇〇〇〇	六・七六四・〇〇〇
英國	四〇〇〇〇〇〇	四・〇八六・〇〇〇
佛國	二〇〇〇〇〇〇	
西班牙	一・八八〇・〇〇〇	二・一二二・〇〇〇
伊太利	一・〇〇〇・〇〇〇	

第四表 人造絹絲製品輸出入高(單位法)

年次	輸		入	
	織布	其他の加工品	織布	其他の加工品
一九一九	二六・八一〇・〇〇〇	一四二・〇〇〇	四三・四七七・〇〇〇	二・〇一五・〇〇〇
一九二〇	三四・四八〇・〇〇〇	一五〇・〇〇〇	三八五・三五二・〇〇〇	一・九三二・〇〇〇
一九二一	二六・二一〇・〇〇〇	七五・〇〇〇	一七〇・一五二・〇〇〇	二六八・〇〇〇

即上表に見る如く此國に於て生産さるゝ人造絹絲は主として米國に送られ殊に戦時中は獨佛英の輸出甚だしく減少したれば此國に來る注文非常に増加し自

國製品と共に獨逸等の製品をも取扱ひて其輸出大いに増大し收利又甚だ多く我國へも輸出せらるゝ量可成大なり。

一、スプライテンバッハ人造絹絲會社

*Société de la soie artificielle, Spreitenbach.*

佛國ブザンソン、シャルドンネ人造絹絲會社の分工場として硝化綿絹絲を製造したりしも獨逸聯合人造絹絲會社に買収され同社の分工場となる事前述の如し。

二、瑞西ビスコース人造絹絲會社

*Swiss viscose artificial Silk Co. Emmenbrücke.*

ビスコース式に依り操業し此國最大の人造絹絲會社にして瑞西國人造絹絲の生産高は大部分當社に依るものなり、現時社長グーメーンス(*E. de Goumoens, Lucerne*)氏にして工場は山水明眉なるルセルン(*Lucerne*)の近在エンメンブルッケ(*Emmenbrücke*)にあり。

三、グラッツフルグ人造絹絲會社

*Kunstseiden Fabrik, Glattbrugg.*

レーナー氏の特許方法に依り硝化綿絹絲を製造し其創立は一八九四年なりしも後幾何もなく獨逸聯合人造絹絲會社に依り(一)の工場と共に合併せらる。

機械製作工場

一、Wegmann & Cie. Baden, Swiss.

人造絹絲製造用撚絲再繰及び卷返し機製作専門



【地圖解説】

洪牙利

サルバール||第一洪牙利人造絹絲會社

和蘭

(1) アルンネーム||和蘭人造絹絲製造會社

(2) エーズ||和蘭人造絹絲製造會社

(3) プレダ||和蘭人造絹絲工業會社

英國

(1) コメントリー||コイトールド人造絹絲會社

(2) フリント||英國光澤絲製造會社

(3) リバプール||英國光澤絲製造會社

(4) ダービー||英國纖維素藥品製造會社

(5) グレイトヤールマウス||セルロ絹絲製造會社

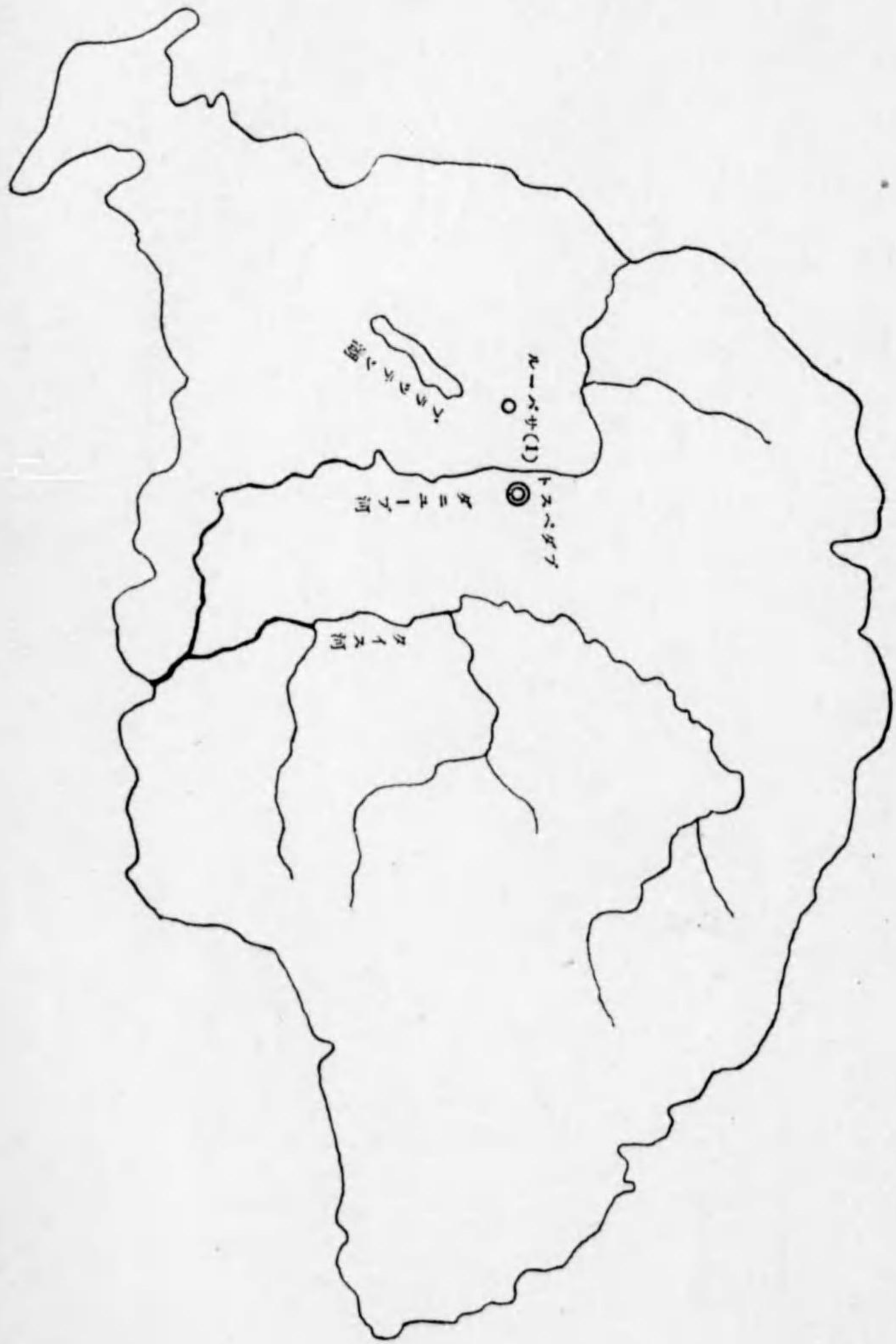
(6) ラグビー||ワルストン人造絹絲會社

瑞西

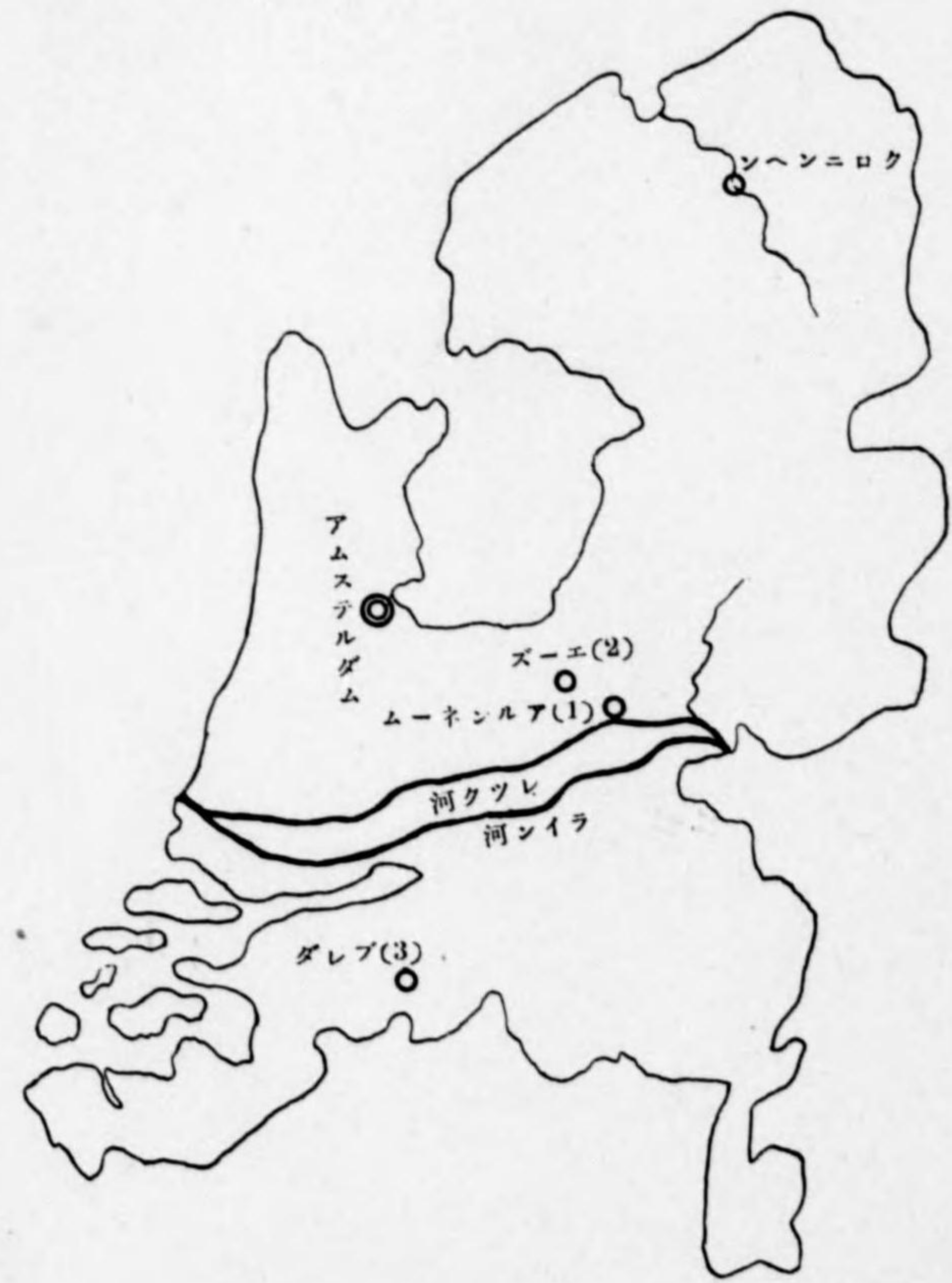
(1) エンメンアルツケ||瑞西ビスコース人造絹絲會社

(2) グラツツアルグ||グラツツアルグ人造絹絲會社

洪牙利



蘭 和



利 吉 英



西 瑞



## 第一〇章 露西亞

### 一、モスコイ人造絹絲會社

白耳義チユービッツ人造絹絲會社の分工場にして資金二五〇萬留に依り硝化綿絹絲を製造せり。

### 二、ソシヤクゼー人造絹絲會社

一九〇九年資金四〇〇萬留を以て創立。

### 三、ロツヅ人造絹絲會社

一九一〇年資金三〇〇萬留を以て創立せられ硝化綿法に依り操業せり。

### 四、ビスコース人造絹絲會社

社は、戦前一日約五〇〇盃を生産せり、當社は佛國ビスコース會社、洪牙利ビスコース會社、伊太利ビスコース會社の三工場と全然同一の特許方法に依りビスコース人造絹絲を製造せり。

## 第一章 波蘭

### 一、トマシヨウ人造絹絲會社

一九〇九年の創立にして硝化綿法に依り白耳義人の經營せしものにして工場はトマシヨウ (Tomashou) 在ウイラノウ (Wilanow) にあり、戦前約一〇〇〇人を使用し一日一五〇〇疋を産し米國へ主として輸出し尙其工場を擴張中なりしが大戰に依り一時中止し戦後は國狀の紛糾と原料藥品凡て高價に再開殆んど困難とせられたりしも一九二〇年秋頃之れを再開し現下一日五〇〇〇疋を生産す最近政治上の關係より工場を獨逸に近き地方に移轉する事に決定せりと云ふ。

尙當工場は一九二〇年火藥工場を増設し波蘭が露國過激派軍と交戦するの用に供する火藥を製造せり。

### 第二章 チエツコスロバツク

大戰の結果獨立せし新興國は事々に凡て新設にして人造絹絲業又新興の工業

たり、而して其工場は皆エルベ河流域に存在す

### 一、第一チエツコスロバツク人造絹絲會社

Erste tschecho-slowakische Kunstseiden Fabrik-A. G.

資金一三〇〇萬クローネを以て創立し工場をアルノウ (Arnaud) 在に三〇〇萬クローネを費して建設し一九二一年四月以來操業し四五〇人を使用し一日約七五〇疋を生産す。

### 二、バーデル會

Firma Gebrüder Baader, Mahrisch-Osttau.

尙商會は奥國維納に本店あり、資金二〇〇〇萬クローネを以て一日一〇〇〇疋生産の工場をモラヴィア (Moravia) に建設の筈なり。

### 三、第一ボヘミヤ人造絹絲會社

Erste Böhmische Kunstseiden Fabrik, Reichenberg.

テオドルリードツヒ氏 (Theodor Liebig) が主となりて資金四千萬クローネを以て工場を早くよりライヘンベルグ (Reichenberg) に建設中なれども一九二二年六月十

日ブラーグなるボヘミアユニオン銀行樓上に於て初めて其創立總會を開けり。  
 當社幹部次の如し。

Theodor Liebzig, Reichenberg (社長) Oskar Kohorn, Chmunitz (副社長) Rudolf Neumann,  
 Prag (副社長) Otto Bankwitz, Reichenberg (総理事) Wilhelm Dolabola, Chwalkowitz (総理事)  
 Franz Chytil, Prag (理事) Eduard Langer, Jägerndorf (理事) Siegfried Kohorn, Wier. (理事)  
 Siegfried Kubie, Prag (総理事) Georg Mauthner, Prag (総理事) Wilhelm Oßenheim, Wien.  
 (総理事) Dr. Josef Ruzicka, Prag (総理事) Karl Schuster, Wolkowitz (総理事) Eduard Stutz,  
 Prag. (理事) Otto Weizenberger, Chemnitz (総理事)

四、第一ボヘミア光澤絲製造會社

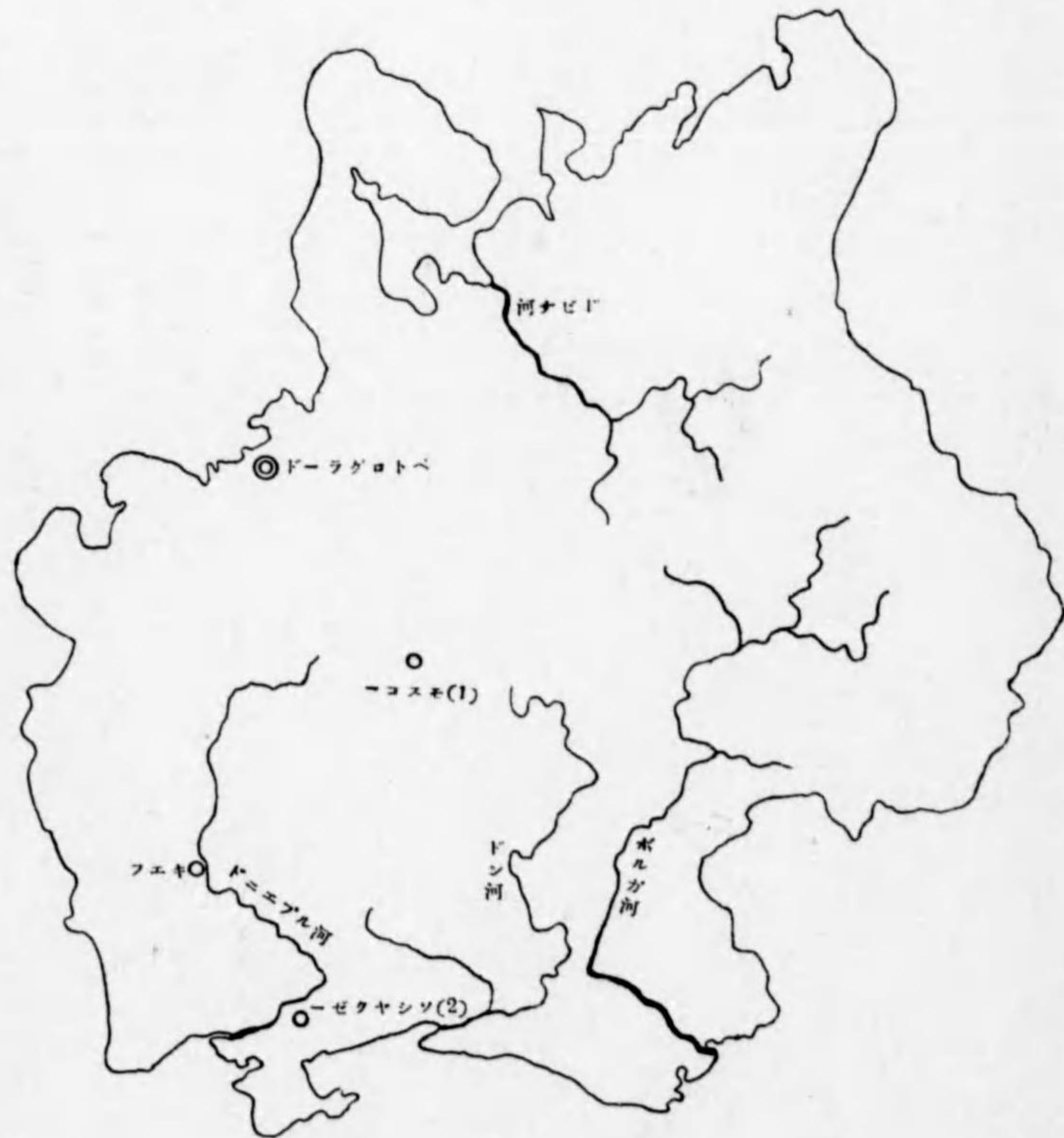
Erste Böhmisches glanzstoff Fabrik Prag.

ブラーグなるウオルフーシユライム商會(Firma Wolf und schleim)ヨスニレールウエ  
 ンシユタイン商會(Firma Jos und Löwenstein)は銀行業者たるチブノステンスカバン  
 カ(Zivnostenska-banka)及びデスコンツ(Banque d'Escompte)と共同し四〇〇〇萬クロー  
 ネの資金を以て當社を創立し獨逸エルバーフェルドなる聯合光澤絲製造會社よ

り技術機械等凡ての供給を受けビスコース法に依る工場をロボヂツツ(Lobositz)に  
 建設中なり。

當社の企業には他の系統の者も入り前記チブノステンスカバンカは獨人の經  
 營に成るものにして一九二一年六月ブライス博士(Dr. Preis)は社長に聯合光澤絲  
 製造會社の社長たるヨルダン博士(Dr. Jordan)及びスタイネル氏(R. Steiner)は代表者  
 に各推舉せられたり。

# 露 西 亞



## 最近人造絹絲工業概説

### 【地圖解説】

#### 露 國

- (1) モスコイ || モスコイ人造絹絲會社
- (2) ソシヤクセー || ソシヤクセー人造絹絲會社

#### チエツコスロバツク

- (1) アルノウ || 第一チエツコスロバツク人造絹絲會社
- (2) モラピア || パーデル商會
- (3) ライヘンベルグ || 第一ボヘミヤ人造絹絲會社
- (4) ロボヤツツ || 第一ボヘミヤ人造絹絲會社

#### 埃 太 利

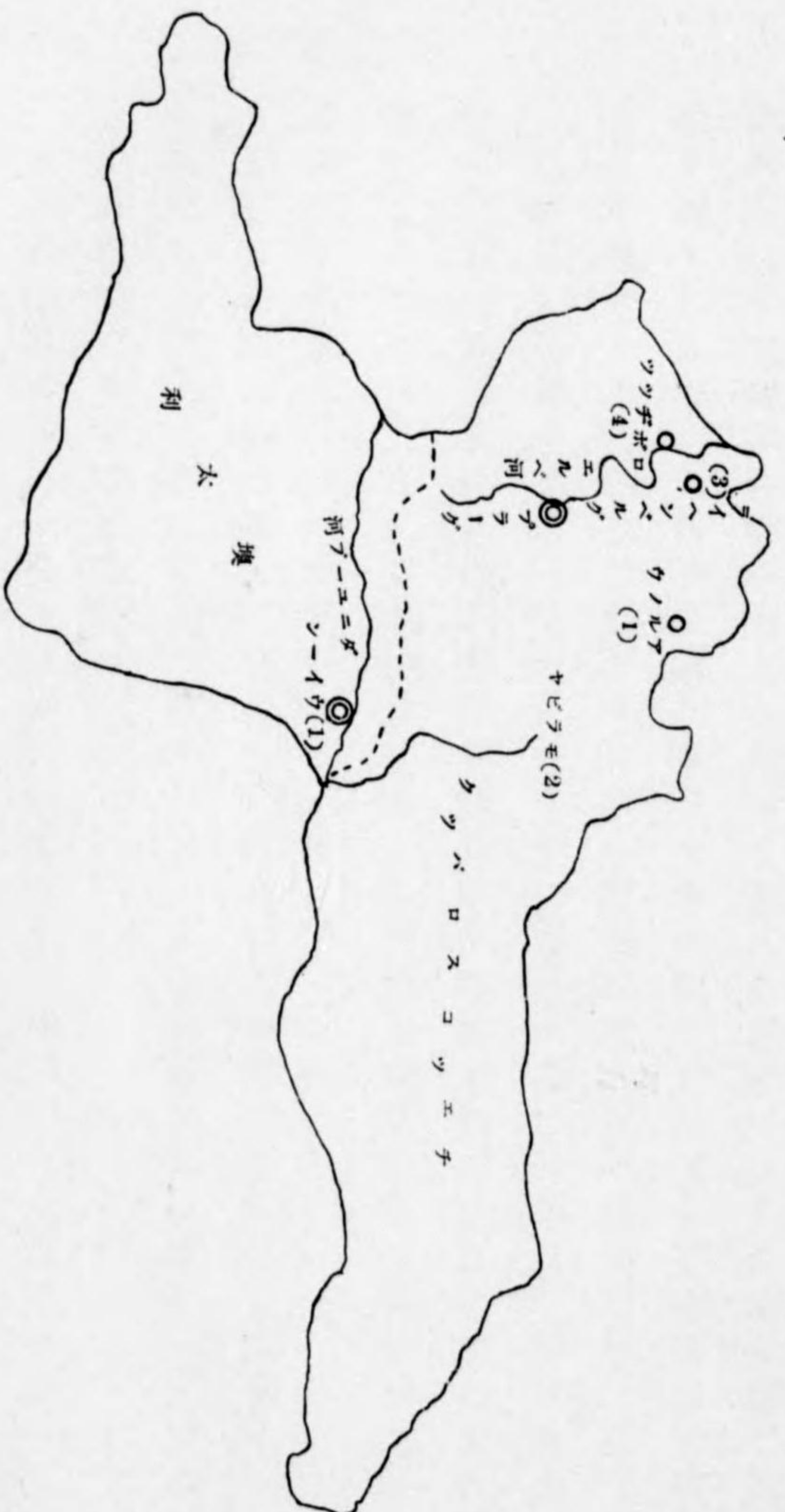
ウイーン || 西方の「スト、ベルテン」に第一埃國光澤絲製造會社あり



蘭 波



クツパロスコツエチ・利太塊



第一三章 米 國

蠶絹絲の消費額に於て世界に冠たる米國は人造絹絲の消費量に就いても亦世界第一にして國家經營の上より絹絲の輸入を緩和せん爲自國に於て蠶絲業の發達を圖りしも未だ不可能の域を脱せず風土既に蠶絲業に不適なるに國狀又更に之れに適せず此國將來に於ける蠶業の發達は殆んど不可能の事に屬す。

然れども絹製品工業の隆盛は時と共に愈進み之れが製品の國內消費及輸出高年々増加の勢を示せり茲に於てか蠶絲業の移植を捨て之れに代る可き物の探究をなし生物に依らずして機械力に依りて絹絲の生産をなし其價格安き人造絹絲の應用を益擴大するに到れり。

斯くて人造絹絲の輸入は年と共に増加し近來絹價の高騰と需要益増加するに供給殆んど之れに添はず年毎に不足量大となり行く事は之れを補はんとして人造絹絲の應用漸増の狀態にあり。

人造絹絲及其製品の輸入額が國勢統計上一類別として分離表出さるゝに到れ

るは一九一一年にして同年全量として一九四七・四二三封度其價額三・二七九五  
 九弗にして此中一二封度の外は凡て歐洲より來り英國は之れが主要國にして七  
 二・四六五四封度八七・七三五七弗次に獨逸は六二・九五七四封度一・三五一四一六弗  
 埃洪國二二・七〇〇四封度二七・四五六六弗白耳義一五・三六三二封度二〇・七四四  
 弗佛國八〇・三五一封度三一・四六五九弗瑞西一〇・三〇一三封度二二・五一一五五弗其  
 他少量は他の諸國より輸入せられ其佛獨よりの品は他に比し割合に高價なり。  
 一九一二年より一九二〇年に至る九年間人造絹絲加工絲の輸入量は一四・三三  
 〇・三六六封度二五・三五一・九〇六弗にして即平均一五・九二二六三封度が年々輸入  
 せられし割合にして之れに九年間他の人造絹絲製品は五・二三六六五〇弗即一ヶ  
 年平均五八・一八五〇弗の輸入を見尙一九一一年より一九二〇年に到る期間前記  
 兩者の輸入總額は三三・八六八・一一五弗に達せり。  
 次に之れが輸入高表を示して參考に資せん

年次	人造絹絲加工絲		其他人造絹絲製品(弗)
	數量(封度)	金額(弗)	
一九一三	一・四五四七	一・七五七九	八八九五〇
一九一四	二・七五九三	一・七五七九	八八九五〇
一九一五	二・七八〇〇	一・七五七九	八八九五〇
一九一六	二・〇四一・九三	一・七五七九	八八九五〇
一九一七	五・〇六六・一三	一・七五七九	八八九五〇
一九一八	二・九三四・二一	一・七五七九	八八九五〇
一九一九	二・九八二・二二	一・七五七九	八八九五〇
一九二〇	二・二五一・九二	一・七五七九	八八九五〇

更に一九〇五年より一九二〇年に到る一六年度の人造絹絲の輸入額は

年次	輸入額(弗)	年次	輸入額(弗)
一九〇五	一八四・〇〇〇	一九一三	三・二七八・〇〇〇
一九〇六	二七三・〇〇〇	一九一四	四・〇八二・〇〇〇
一九〇七	八七四・〇〇〇	一九一五	三・五八七・〇〇〇
一九〇八	一・八七四・〇〇〇	一九一六	三・一〇二・〇〇〇

即輸入額漸次減退の兆あり、之れ價格の幾分低下せるにも依れども國內生産高大戰以來頓に増加したるに主として原因す、殊に最近政府は自國斯業の保護の爲に關稅を改正し從來價額の三〇%なりしを人造絹絲の品質に依り一封度に付き四五―六〇仙となせり。

今此國輸入人造絹絲一封度の價格を自國製品價格と對比すれば次の如し。

年次	輸入人造絹絲價格	自國產人造絹絲價格
一九〇九	二・四二八〇〇〇	一九一七
一九一〇	二・〇六二〇〇〇	一九一八
一九一一	三・二八〇〇〇〇	一九一九
一九一二	二・六四八〇〇〇	一九二〇
一九一七	二・五	二・〇

(單位弗)

一九一八 三〇 四〇  
 開戰の前年英國は一六・一七〇〇〇弗、獨逸は一〇・四五〇〇〇弗、佛國は三四・四〇〇弗、白耳義は六八・五〇〇弗を輸入し、獨逸は第二位にありしも戰後輸入人造絹絲の最大量を送るものは矢張り英國にして一九一八年の如き輸入人造絹絲は殆んど此國より輸入せられても一九一九年に於ては瑞西より一九八三・二五一弗を輸入し、英國よりは一・三一・一八八三弗にして同年獨逸よりは二〇〇・六八五弗を輸入し、同年の統計より見るに第五位となれり、之れ大戰の結果國力恢復の未だ全からざるが故なり。

次に一九二〇年に於ける人造絹絲及其製品の國別輸入高を表示せば

輸入國	人造絹絲製品(弗)	
	數量(封度)	金額(弗)
佛 國	七・八四九	三二・三七一
伊太利	六三・九一四	二五・六八七二
英 國	二二・五七二	四四・五〇八
		七五・六五九

瑞 西	二三五〇四	六三八二五	二二八八八九
日 本	二二五	一〇二五	—
其 他	四六一九六	一〇八二一〇	二七二四一

即伊太利最も大にして英國甚だ減少せるを見る。

此國人造絹絲工場の最初に建てられたるものはゼネラル人造絹絲會社にして幾多の苦辛を重ね實驗をなし其成巧に努力せしも遂に製品の市場に出ずるに到らずして經營中止の止むなきに到りゼナスコ絹絲會社之れに代りて事業を繼續し創設より實驗研究に費したる金額一五〇萬弗以上に上り漸く少量の製品を市場に出す事を得たりしも未だ工場規模經營の樂觀を許さず一九一一年迄は大工場を立つる事なく専ら實驗工場に於て研究に没頭し同年初めて英國コートールド會社の米國支會社たるビスコース會社の創立を見ると共に其事業の全部を之れに譲り同社の名稱の下に之れが工場を經營するに到れり斯くてビスコース會社は英本國に於ける經驗を米國に持來して之れに適合せしめ此國唯一の工場として其注文頻りに到り本國よりの輸入に比し生産費及關稅等の關係より收利息

大となり工場は擴張に擴張を續け一方品質の改良に萬全の努力を捧げ今や品質に生産に世界第一を誇るを得るに到れり。

次に此國人造絹絲の生産高及び輸入高を表示して其發展の狀を視はん

年次	生産高(封度)	輸入高	合 計
一九一三	一五六六〇〇〇	二三〇五〇〇〇	三八七一〇〇〇
一九一四	二四四五〇〇〇	二九二三〇〇〇	五三六八〇〇〇
一九一五	四二一一〇〇〇	二七一八〇〇〇	六八二九〇〇〇
一九一六	四七四四〇〇〇	八六四〇〇〇	五三九八〇〇〇
一九一七	六六八七〇〇〇	五五二〇〇〇	七二三九〇〇〇
一九一八	五八二八〇〇〇	九三〇〇九九	五九二一〇九九
一九一九	八〇〇〇〇〇〇	一二四八五一三	九一四八五一三
一九二〇	八〇〇〇〇〇〇	一八四六八七五	九八四六八七五
一九二一	一五〇〇〇〇〇〇	三六六七一八〇	一八六六七一八〇
〔一九二二(四月迄)〕	七三一五〇〇〇	一〇三四六〇七	—

(但製造者計算)

斯くて生産高は益増大し殊に昨年の如き其前年の約二倍量を産するに到れり、之れ新設デュボン纖維絹絲會社及米國チュービッツ人造絹絲會社の工場並にビスコース會社の擴張工事俊成に近づけるが故にして國立商業銀行(National bank of Commerce)に依れば一九一五年には米國使用全量の六〇%を國內に於て生産し一九一八年には九八%を製し之れもとより戦亂の爲なりと雖も一九二〇年には八〇%を産するに到れりと云ふ。

而して後述の如く尙新工場の續々設置せらるゝあり、之れが消費者たる機業織物業等の發達と共に此國人造絹絲工業が世界最大の覇を稱するも近きにある可く殊に近來人造絹絲の品質良化し細織絲の製出せらるゝに到り且人造絹絲製品の取扱法も進歩し之れに依りて人造絹絲の從來缺點とせし所を或程度迄満足し得て國民の嗜好又之れに適し爲にペンシルベニアの絹織工場の如き一般に其使用蠶絹絲量を半減し人造絹絲を以て之れが代用とするに到れり。

此國人造絹絲消費の中心地は蠶絹絲消費の中心たるパターソン(Paterson)地方にして一九一五年頃迄は消費量の七五%が莫大小に使用せられたれども其後織物

にも應用せられ現今に於ては其消費の割合は靴下に三〇%編物莫大小に三〇%廣巾織物に四〇%にして一九二〇年の頃は一年六―七百萬封度を使用せしも尙單絲細織なる人造絹絲の製出容易とならば下着類及びリボンに一層の用途あるが故に此上尙二百萬封度は消費さるゝ見込みなりき。

今下に人造絹絲の使用を各其使用者の種類に従ひて分類し一ヶ月平均の使用量を示せば(一九二〇年九月調査)

使用用途	一ヶ月平均使用量(封度)
スエーター類	五〇〇〇〇
ネクタイ類	二〇〇〇〇
組紐類	一五〇〇〇
手袋頸巻類	一〇〇〇〇
トリコレット	一〇〇〇〇
莫大小	二〇〇〇〇
シャツ等	五〇〇〇〇

廣巾物 五〇〇〇〇  
 小間物及裝飾品 二五〇〇〇  
 絹綿天鷲絨(ララシテン) 五〇〇〇  
 絨氈 五〇〇〇  
 總挿絲其他 五〇〇〇

此計五三五〇〇〇封度にして即一年約六―七百萬封度の消費を示し尙此處に掲げざる「瓦斯マントル」「レース」靴下留等の雜類(此等は使用量比較的少し)の消費量は之れを除外せり。

今此國人造絹絲の消費量を表出すれば

年次	消費高(封度)
一八九九	六〇五六
一九一〇	二五〇〇〇〇
一九一一	二〇〇〇〇〇〇

斯くの如く人造絹絲の消費量は益々増加し殊に戰時中の如き藥包裝、落下傘其他航

空及び軍需品製造に要したる蠶絹絲甚だ大量となり爲に絹業に使用する原料は量に於て不足を告げ其代用品として人造絹絲の使用激増し戰後と雖も尙益々増大の勢を示しビスコース會社のサルベード氏の計算に依れば一九二一年度米國人造絹絲の消費量を持越一五〇萬封度輸入三五〇萬封度生産一五〇〇萬封度合計二〇〇〇萬封度となし之れを九年前の生産及び輸入高の三八七萬封度に比すれば五倍にして我百斤俵に換算せば約一五萬俵となり昨年蠶絹絲輸入高四五・三五五〇九五封度(内柞蠶四七・七六九五封度)に比すれば約五〇%に相當す。

人造絹絲の製品が初めて輸出統計中に一項目を占むるに到りたるは一九一七年にして同年の輸出額は八五七・三一八弗にして此等は凡て世界の各地に散布せられ其詳細下表の如し(單位弗)

輸出先	輸出額	輸出先	輸出額
丁抹	八・二八五	バームダ	二八八
伊太利	一〇・四七一	加奈陀	二〇一・七五三
英蘭	三六八・五六三	グアテマラ	一七三



佛國	四・九六八	ニカラグア	二・四〇〇
諾威	三・五四四	メキシコ	一・七四九六
蘇蘭	一九四	英領西印度	五二六
支那	一・四〇五	丁抹領西印度	七九
蘭領東印度	三二九	蘭領西印度	一・四二八
英領印度	二二〇	英領ホンジュラス	六三九
日本	一七〇七五	コスグリヤ	七二八
亞爾然丁	三一〇九〇	ホンジュラス	一・三三八
エクアドル	一・一〇二	バナマ	二・八三一
智利	三・五七七	ニュウフィンランド	三二二
パラグアイ	二六七	キューバ	二〇・九六〇
ウルグアイ	五・一六八	ドミニカンパブリック	二七五
ブラジル	九・一〇六	濠洲	八・八五八九
コロンビヤ	六八七	ニュウジランド	二・四九〇四

英領ギヤナ	七一九	ファイリッピン	五・三五七
ペルー	七八三	ベネジエラ	二・一九八

總計 八五七・三一八

又人造絹絲製莫大小其他の輸出高左表の如し

年次	人造絹絲製莫大小		其他の製品(弗)	人造絹絲製品 總輸出高(弗)
	數量(打)	金額(弗)		
一九一七	一六七・〇〇〇	一・九三二・〇三四	四七・二六	八五七・〇〇〇
一九一八	五〇〇・九三七	一・九三二・〇三四	四七・二六	二・三三九・〇〇〇
一九一九	一・三三七・六一	六・八七・六五五	八四〇・八一	二・三三九・〇〇〇
一九二〇	一・一〇五・三〇八	七・七九二・九六五	九七・二四三	
尙一九一九年以降人造絹絲莫大小の輸出先別統計次の如し(單位打)				
一九一九年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	
白耳義	一三・一一三	九・九九一	一三・七一四	
丁抹	一二九・八七九	六六・一九三	一六・三五二	

佛國	三・二三一	二〇・七三四	五・三七六
伊太利	二・三〇〇	一六・〇一五	一四・六一一
西班牙	四・七五五	七・七〇〇	四・二二五
瑞西	八・四七〇	三・八七六	三・四〇九
英國	四五・九五五二	五七・七八八五	二九・四三四一
加奈陀	五七・九〇五	六二・二一四	一二・〇三四
メキシコ	八・三六八	七・七五五	一一・五二八
キューバ	三三・八二九	三一・三二〇	二九・九一四
アルゼンチン	一三六・五四九	九〇・六八六	六八・六一〇
ブラヂル	一・七八九	一・八八八	一・四六六
智利	七・九四九	五・一三六	八・〇九八
ウルグアイ	一一・八三四	一八・〇一三	一二・五八二
英領東印度	一・八一四	三・八四一	九・八二二
濠洲	二五五・八一〇	七五・六一六	四四・七四二

ニュウヂーランド	五一・四七四	一〇・六七八	七・七三一
英領南亞弗利加	六一・七七三	一三・九〇八	九・六二九
其他	六七・二一七	八二・九〇五	九〇・六一〇
合計	一・三一七・六一一	一・二〇六・二五四	六五八・九七四

斯くの如く漸次増加の勢を示し本年四月中輸出入造絹絲及び蠶絹絲莫大小は一  
 一五・八〇〇打にして内外商事局に依れば此金額五九〇・五八五弗其中四三〇・六  
 八弗(九九・六三七打)が人造絹絲製にして一六〇・五一八弗(一六・二四三打)が蠶絹絲製  
 品なれば以て此方面に於ける人造絹絲應用の盛大を偲ぶを得べし而して此等製  
 品の輸出先は前表の如く主として支那、日本、伊太利、英國、南米等にして人造絹絲製  
 品が世界主要産絹國たる上記三國に輸送せらるゝ量甚だ大なるは又奇なる現象  
 と云ふ可し。

又他の統計に依れば一九一九年の人造絹絲莫大小の輸出高は總計八・七九〇・七  
 二一弗にして之れが輸送先別の詳細次の如し。(單位弗)

輸出先	金額	輸出先	金額
英蘭	四・三四九・五五三	英領南亞米利加	二五〇・一五六
加奈陀	四五一・六一一	丁抹	七三〇・一五六
濠洲	八〇一・四六八	アルゼンチン	五八〇・四九〇
ニュウヂーランド	二五二・七二六	キューバ	一四八・二三四

(其他の少量はスコットランド、印度其他英領諸國へ向へり。)

此國莫大小工業に人造絹絲の應用は既に二十年以來の事にして戦前人造絹絲の大量が此れに用ひられたる事前述の如く戦後全消費高に對する使用割合は半減以上の低下を見たりと雖も總使用量は尙年と共に増大しつつあり。

人造絹絲製衣服地が最初メトロポリタンストアに於て賣られたる時は一ヤード四五〇―六五〇弗にして靴下の如きは戦前一足小賣にて五〇仙なりしも(人造絹絲相場一封度約一・七五弗一九二〇年夏頃には高騰して一足二弗の高價を示したる事あり、之れ原料人造絹絲の騰貴に基因するも亦其需要の激増せる之れが一因たり。)

### 一、ゼネラル人造絹絲會社

General artificial silk Co. Landsdowne, Pa.

Ganneco silk works.

米國最初の人造絹絲工場にして一米國絹業者が佛國ブザンソンに到りシャルドンネ氏の工場設計を見之れに心動き其製品一俵を持歸りて製造に着手し當社を創立し製造に苦辛したりしも遂に成功に到らずして止み後にゼナスコ絹絲會社(Ganneco silk works)が之れを繼承し製造に全力を注ぎたる結果僅かに其製品を市場に出すに到り漸く進展の期に臨みたるも時恰も英國コートールド會社が其分工場としてビスコース會社の創設をなすに會し協約成りて同社の工場として其全部を譲渡せり。

### 二、英國ビスコース會社

American Viscose Co.

一九一〇年資金二百萬弗を以て創立し前記(一)工場を譲受け英國コートールド會社の分工場として同社と同一方法に依りビスコース人造絹絲を製造せしが其

後擴張に擴張を重ね現時資金一千萬弗にして其製造工場も「マークスフック」lew イストン」及び「ロアノーク」の三ヶ所にありて本部をマークスフックに置き技術部長兼總支配人に「エルンスト」博士 (Dr. C. A. Ernst) 營業部支配人にサルベード氏 (Samuel A. Salvage) ありて之れが經營を統轄す。

當社製品は英本國の夫れと共に品質甚だ良好にして市場に好評を博したりしも大戦と共に船腹の不足に依り瑞典より來る原料の輸入激減し當社生産量從つて減少し其原料を他より取りて之れを補ひし爲原料の優秀ならざりしと職工の原料に對する不慣とは一時其品質を低下し如何の批評ありしも今や原狀以上に改進して需要益々増加し其品質に於て將た生産高に於て此國第一なり。

A. マークスフック工場 (Marcus Hook, Pa.)

マークスフックはチェスター (Chester, Pa.) ウィルミントン (Wilmington, Del.) の間にありてデラウェア河に添へる人口約二萬を有する小都なり。

當工場は其初めネリーバーンス農場 (Nellie Burns) を五萬弗にて買収し工場を建設して一八〇〇人を使用したりしも一九二〇年夏頃には其規模擴大して三五〇

〇人を使用し現下五千人の従業員を有して尙其擴張中にあり。

而して従業員の爲に當社は所謂「工業村」を建て終日勞苦に疲勞せし身心を安靜せしめ従業員の能率増進を圖ると共に食住の大安を得せしむ此村は二百六十戸の住宅と二個の寄宿舎及び諸品販賣所、食堂、慰安場各一個よりなり住宅には其間數八室及び六室の二様ありて各家共に少くも三個の寢室を階上に具へ階下には居間、食堂、炊事場を具へ張出の玄關及び最新式浴室あり、壁は全部煉瓦にして屋根はスレート葺、玄關の床面はセメント打とし凡て水道及び瓦斯の準備整へる地下室を有し獨立せる熱氣加熱装置あり、街路の兩側には樹木を植へ住宅の前は生垣にして後は低き鐵柵を以て後庭を互に距て道路はセメント製の縁石と小溝とを具へ割栗石を以て敷きセメントの兩側道には其兩側に所々縁草園あり、販賣所は中央街の端にありて二個の寄宿舎は村の中央に位置し食堂及び慰安所は同一建物内にあり、公の饗應にも社交的のものにも用ふるを得んと建物には二階建にして煉瓦及び石材を以て防火構造に建築し階下は男用食堂、化粧室、外套室、食事準備室及び貯藏庫あり、階上は女子食堂及休憩室ありて尙慰安の目的と饗應の目的に適

する如く構造し建物の頂上には屋上園ありてプロムナード瓦を以て葺けり。  
尙當工場には最近一五萬弗の經費を以て三階及び基礎に建添へをなして工場を擴大せり。

**B. レウイストン工場 (Lewiston, Pa.)**

此町は人口約一萬五千ペンシルバニア洲の中央に位置し之れに添ひて流る、  
河流はサスケハンナ河 (Susquehanna R.) と合してチエサピーク灣 (Chesapeake B.) に入る。  
當工場は新設工場にして昨年夏頃より漸く製造を開始し毎週約一〇萬封度を  
生産し當社の生産額を約三〇%増加し之れが建設には約一ヶ年を費し尙此處に  
も従業員の爲に前記マーカスフック工場の夫れと同様の住宅二七五戸を有する  
工業村を建設中にして約三〇〇萬弗の費用を要すと。

**C. ロアノーク工場 (Roanoke, Va.)**

ロアノークはバーヂニア (Virginia) 洲の西南にありて人口約四萬五千なり。  
當工場は一九二〇年春頃操業を始め職工約一五〇〇人を使用し一年約五〇〇  
萬封度を産す此工場敷地は一〇〇弗の單位工場を五個設置するに十分の面積を

有し其第二擴張工事は殆んど完成し本年七月には運轉の筈にして之れが建設に  
は約一〇〇萬弗を要し尙五萬弗の費用を投じて女工寄宿舎を建設中なり。

當工場はネレン (H. C. Neren) 氏其長となり之れを監督す。

**D. ニトロ原料工場 (Nitro, W. Va.)**

ニトロは此國火藥製造の中心地にして西バーヂニア (West Virginia) にあり。  
當社は此處に五二エーカーの地をチャールレストン工業會社 (Charleston Industrial  
Corporation) より購入し此中には三個の大なるバルブ工場ありて當社人造絹絲製造  
用原料バルブを此處にて製造す。

上記の如く當社一年の生産高は三工場にて總計二五〇〇萬封度にして尙現時  
擴張中にあれば完成の上は驚く可き大量を産するに到る可し更に當社發達の經  
路を示す爲に過去の産額を米國全輸入高と對比表示せん。

年次

全輸入高(封度)

當社生産高(封度)

一九一

三二〇〇〇〇

一九一二

一・六三一・八〇七

一・一一七・二八五

一九一三	二・三九五・五九九	一・五六五・五八三
一九一四	二・五九〇・四九〇	二・四四三・九五四
一九一五	三・〇四四・三一六	四・一〇七・三八五
一九一六	九七三・〇八二	五・七四一・三八八
一九一七	五四三・四四六	六・六九六・八六一
一九一八	一二〇・五四〇	五・八二七・六二七
一九一九	一・〇七二・〇四〇	八・一七三・八二四
一九二〇		九・〇〇〇・〇〇〇
一九二一		一・八〇〇・〇〇〇

三、デュボン纖維絹製造會社

Dupon fibre silk Co. Dover, Del.

デュボン會社(E. I. Du Pont de Nemours & Co.)は人造纖維商會(Comptoir des Textiles artificiels, of Paris, France)と共に一九二〇年九月一〇〇〇萬弗の資金を以て創立したる會社にして後者の商會は佛、伊、白、瑞にある人造絹絲諸工場を統轄せるものに

して此等工場と同一方法(ビスコース式)に依り操業す、而して之れが現業員の主腦者等は既に一九一五年より米國産原料及び藥品につき此國に於て十分研究し過去五ヶ年の間に得たる經驗と智識とは製造方面に於ける當會社の前途を甚だ確固ならしめたり。

當社營業部はデラウエア州ウイルミントンなるデュボンビルディング内にありて其工場は紐育洲の端ナイアガラ河に近くバッファロー(Buffalo)市の近在に一〇〇エーカーの地を買収し之れに最新式に建設し建物の面積は二二五・〇〇〇平方呎にして殆んど其全部は一階建にして此等建築工事の全部はデュボンエンジニアリング會社(Dupont engineering, Co. of Wilmington, Del)の手に成り一部機械製作も行ひ一九二〇年八月工場建設に着手せり、當工場は一九二一年七月操業を開始し一五〇〇馬力の電力の供給を受け約七〇〇人を使用し其過半は女工にして一五〇デニールを一日約一五〇〇封度生産し其他三〇〇デニール迄各種のものを作り近來少量なれども八〇—一〇〇デニールをも作りて此等を總計して一年約一五〇萬封度を生産す、現下經費二〇〇萬弗を投じて之れが第二次擴張工事中に

して本年の終りには殆んど完成に到る可く其上は建坪二〇〇萬平方呎となり生産高も現在の二倍即一年三〇〇萬封度を越ゆ可く之れが爲に本年初め其資金を一二五〇萬弗に増加せり。

當社は尚ミルビル (Millville N. J.) に一五〇エーカーの地を借り入れ又トナワンダ (Tonawanda, N. Y.) に於ても工場地を購入せりと云ふ。

當社幹部次の如し。

重役 Lamnot du pont    Walter S. Carpenter, Jr.    William C. Spruce, Jr.    W. F. Pickard,  
F. Donaldson Brown,    Leonard A. Yerkes,    Benjamin C. Paskus,    Albert Blum.  
社長 Yerkes    主計 B. M. May.    製造支配人 Maurice du Pont Lee.    化學部監督 Dr.  
George Rucker.    技師長 C. J. Bacon.    機械部監督 E. K. Gladding.

#### 四、米國纖維製造會社

American fibre Corporation.

American Borvisk Co.

National artificial Silk Co.

#### Industrial fibre Co.

最初ナショナル人造絹絲會社 (National artificial Silk Co.) と稱し人造絹絲を製造せしが後ボルビスク會社と改稱し (American Borvisk Co.) ボルビスク氏法に依り製造せしも當社監理者にして發明者たるボルチョウスキ (Benus Borgykowski) 氏は之れを捨て、歐洲に於て人造絹絲工場を設立せん事を企圖して渡歐したる爲フランク (M. J. Frank) 氏は之れを買収し更に改名して米國纖維製造會社となし同氏とサンブリナー (S. S. Sampliner) 氏の共同經營する所なり。

當社は技術指導援助の爲佛國よりアーサー博士 (Dr. F. F. Arthur) を招聘交渉をなし尙株主全部の決議に依り伊國なる伊米郵船會社 (SNIA. 伊國の項参照) と合併せり。

工場はオハイオ州クリーブランド (Cleveland) にあり當社幹部次の如し。

社長 S. S. Sampliner, Cleveland.    副社長 A. J. Bialosky, Cleveland.    主計 M. J. Frank,  
New York.    主記 Henry Beckerman, Cleveland.

#### 五、スウ井スボルビスク會社

Swiss Borvisk Co.

一九二〇年資金九〇〇萬弗を以てデラウエーア洲ドバー(Dover)に創立せられ尙同時に大陸ボルビスク會社(Continental Borvisk Co.)が同一額資本を以て創立されたり(佛國の項参照)。

當社創立者次の如し

F. L. Croftan. H. E. Knox. S. E. Dill. (共にウキルミントンの人なり)

六、セルストロ纖維絹絲會社

Cellustro Fibre Silk Co.

Lustron Co.

資金五萬弗を以て創立せられ醋酸纖維素絹絲を製造する筈なれども製品の染色困難の爲未だ製品は市場に出でず工場はマサチューセツツ洲ボストン市の南部にあり當社創立者次の如し。

Margons L. Miranda. Jacob Isaacs. Sarah Isaacs.

七、米國チュービツツ人造絹絲會社

Tubize artificial Silk Corp.

一九一九年終頃米國は一日二萬疋の人造絹絲を消費し然も生産之れに及ばざる事遙かなれば之れを米國に於て製造し其從價税三五%を免るれば賣價又從つて低廉に市場に提供し得ん事を考へ白耳義なるチュービツツ會社は其分工場を米國に建設せんとし尙米人の之れに共合せん事を説き遂に白米合併にて一九二〇年資金五〇〇萬弗を以て創立したる會社にして後資金を一〇〇〇萬弗に増し白國チュービツツ會社の特許權を買収したる形とし工場をホープウエル(Hope-well, Va.)に建設せり、此地は戰時中軍需品製造地たりしに因り鐵道四通八達し交通極めて便利に勞力又甚だ得易き利點あり、當社は此地に約四〇エーカーの面積を購入し一〇個の主要建物より成る工場を建設したりしも更に二五〇エーカーを買収して三五〇軒の住宅と七棟の寄宿舎を建設し現下工場の廣さは一七一・六〇〇平方呎にして全部煉瓦及鐵を以て構成せり。

當社工場建設に先ち白國製造技術者は米國產原料たる綿屑及び藥品併に小規模機械につき十分の練習を行ひ白國產の夫れよりも優良なる事を知り一方當社



化學部技師たるヒートン (E. Heaton, Hemminway of North Haven, Conn) 氏はレウキス (J. A. Lewis) 氏と共に一九二〇年一〇月白國に渡り人造絹絲製造の研究に數ヶ月を費して歸國せり。

當社は硝化綿法に依り操業し其初め一日約一八〇〇封度を生産し其製品仕上の割合はA格八〇% B格一五% C格五%にして主として細絲を製造したりしが現今に於ては工場の完成と共に生産高非常に増し一年約三五〇萬封度を製造し二五〇〇人の従業者を使用し三五、六〇、七〇、八〇、九〇、一二〇デニール等各種の細絲を作り一二〇以上の太絲は全然造らざれども三五デニールの如き細絲は其生産又一定量に限定されあり。

尙最近の報道に依れば當社はホーブツェルなるビー村 (Village B) をデュボン藥品會社より二二五〇〇弗にて購入せりと、此村は戰時中同社多數使用人の爲に十分なる便宜と適應とを與へたるものにして三二五戸の住宅あり電燈水道の設備完備し各戸共に可成り大なる庭園あり。

白國チュールピッツ會社總支配人エマラーツ (A. Everarts) 氏は當社創立に甚だ力を

盡し之れが主腦の位置にありしが現時はビンドシドラー (Emile Bindschidler, 487 Broadway, New York) 支配人となりデュイス (Gerrit Duy's) 氏營業部長たり尙當社技師たるメイグス (Meigs) バセット (Bassett) スローター (Slaughter) の諸氏はサミュエルビーサドラー會社 (Samuel P. Sadler & Sons, Inc, 210 South 13th. St., Philadelphia, Pa.) の機械技術部を形成し又前記デュボン纖維絹絲會社と同系會社なるデュボン藥品會社 (Du Pont Chemical Co.) の幹部も當社に出資をなして其營業に幾分の關係あり。

當社此國の代理店はメルケンス兄弟商會 (Merckens Brothers, 487 Broadway, New York) にして此商會主なるメルケンス氏兄弟 (Charles E. 及び Gustave Merckens) は當社幹部の一員たり。

#### 八、米國纖維素藥品會社

American Cellulose & Chemical Co. Ltd. 681 5th Avenue, N. Y.

英國纖維素藥品會社の支會社にして既にノクスビル (Knoxville, Tenn) にタンニン酸書籍雜誌用紙及びバルブの大製造工場之れが建設費二一三〇〇萬弗にしてサウサートンエキストラクト會社 (Southern extract Co.) に依り建築せるあり更に英本

社と同様に醋酸纖維素法に依りて人造絹絲を製造せん事を企劃しメリーランド州カンバーランド(Cumberland)より五哩の地アムセル(Amcell)に工場地をトし一九二〇年四月建設に着手し一日三噸生産の規模を有する工場にして床面約七〇〇〇平方ヤードの建物なり。

最近人造羊毛の製造を發見し其製品は天然羊毛に比し光澤を欠けども耐熱にして纖維長く且強さ及び耐久度に富むと云ふ尙當社は佛國里昂に大なる絹染工場を有し米國染色工業に大資本を投下せるギレー商會(Gillet & Sons)と同盟せり。

九、キユブローズ會社

Cuprose Co. of Philadelphia.

一九二〇年三月の創立にして銅アンモニア式に依り操業す、創立者はサペーヂ(Charles C. Savage)氏、レオポールド氏(Jr. J. D. Leopold)スミス氏(Claude C. Smith)の諸氏なり。

一〇、アクメ人造絹絲會社

Acme artificial Silk Co. Cleveland, Ohio.

人造絹絲及其他の纖維製造販賣の目的を以て一九二一年一月資金五萬弗にて創立され其創立者はハリス(George B. Harris)グリーン(C. H. Green)デバーベリー(M. J. Dieperbury)ノールン(W. D. Cole)マンレン(S. Y. Allen)の諸氏なり。

一一、米國纖維製品會社

American fibre products Co.

一九二一年一月の創立にして工場は米國絹都なるパターンソン(Paterson)の近在ホーソン(Hawthorne N. J.)にあり既に人造絹絲の製造を初め居る由なれども當社事情詳かならず。

工場はディックス氏(R. P. Dicks, 19 North Moore St. New York)に依り建設されたり。

一二、アルバートゲツダベティン商會

Albert Gedda, Bedin & Co, of Paris.

佛國巴里に本社を有する當社は米國に於て人造絹絲製造につき其機械及び工場の研究をなし最近モンドン(M. Mondon)氏はスプリングフィールド(Spring field,

Mass)に數ヶ所の候補地を得たりと。

一三、纖維素絹絲製造會社

Cellulose Silk Co. of America.

一九二一年の創立にしてバタースンの一工場を購入しペンシルバニア州チェスター(Chester)に於て工場を設立し改良せる銅アンモニア法に依り木棉屑を原料として製造し本年九月頃より四〇〇人を使用し其操業を開始の筈なり、尙當社はアブラム會社(M. H. Avram & Co.)が凡てを代表し責任を負擔す。

當社幹部次の如し

社長 M. H. Avram.

副社長 Arthur J. Wilson.

主計 Cushman Newhall

主記 Charles

E. Vanderkleet.

一四、纖維工業會社

Industrial fibre Corp. Cleveland, Ohio.

一九二一年の創立にしてビスコース法に依り操業し其機械及び裝置類の全部は特別に伊國に於て作られしものにして同國製作者が他人造絹絲工場用機械類

の設計製造に際し余裕を見込みて製作し米國人造絹絲業者の需要に宛てんとしたるものを購入せり。

工場はクリープランドにありて當社社長はバーヂ氏(Walter W. Birge)にして生絲輸入業者なるマリッヂ兄弟商會(Berizzi Bros. Co.)のマリッヂ氏(Louis Berrizzi)は當社主記たり。

當社製品の一手販賣店は前記ベリッヂ氏が社長たる纖維商事會社(Commercial fibre Co. of America, Inc., of 15 East twenty-sixth Street.)なり。

一五、キユブラ絹絲會社

Cupra Silk Co. Inc.

一九二二年資金二〇〇萬弗にてバタースンの有名なる絹業者等に依り創立せられ新方法に依り人造絹絲の製造をなす筈にして其第一工場をアセニア(Athenia)と稱する地に約五〇萬弗の經費を以て建設する凡ての設計を了せり、此地はクリフトン(Clifton)に屬する所にして其工場はユーレカ捺染工場(Eureka Print Works)に近く位置しラッカワナ及び西部鐵道(Lackawanna & Western Railroad)の交叉する所

にしてデイツクス氏 (Robert. F. Dicks) が數年研究して成りし人造絹絲製造の獨特の方法と尙之より考案せる種々の特種機械を据付くる筈なり。

當社社長はデイツクス氏にして氏は以前ワガロー (Wagaraw) 漂白工場に關係し現にグレンロック (Glencock) に住居し副社長はブラット氏 (Oliver G. Pratt) にしてヘンリードハーテイ絹絲會社 (Henry Doherty Silk Co.) のドハーテイ氏 (William H. Doherty) は主記にして尙同社のチルトン氏 (Francis T. Tilton) は當社主計なり。

一六、ニウキヤツスルシビツククラブ

Civic club of New Castle, Del.

此クラブの會員は最近人造絹絲工場を建つる爲に五エーカーの地を購入し其資金を募集中なり。

一七、ニトラム製品會社

Nitram Products Co.

一九二二年の創立にして資金二〇萬弗なり人造絹絲及之れに類似品を製造の豫定なり當社はバターソン (230 East 18th street, Paterson, N. J.) にあり。

一八、ジエームス フーパー製造會社

James H. Hooper Mfg. Co.

一九二二年八月の創立にしてバルチモーア (Baltimore, Md.) なるフォールスロード (Fallsroad) に人造絹絲工場を建設の筈なり。

當社は資金二七五〇〇弗にして其重役は James P. Hooper (社長) Jesse N. Bowen, Robert H. Walker. 及び R. Tynies Smith, Jr. なり。

更に此國に於ける人造絹絲の販賣及び輸入業者の主なるものを列挙して此種商品取扱者の参考に資せん。

I. Commercial Fibre Co. of America, Inc.

伊國産人造絹絲の販賣を目的として設立せられしものにして社長ベリッチ (Louis Berrizzi) 主計トログナギー (G. Tregnaghi) 主記ガークス (P. G. Gurgis) の諸氏が當社の幹部にしてベリッチ氏は蠶絹絲輸入業を営みトレニヤギー氏は伊國チユーロン市の商工郵船會社の専務にして同社が伊國人造絹絲業の總元締めをなせる事伊太利の條下に述べたるが如し尙氏は一九二〇年一月中旬人造絹絲業及

び其販賣加工の状況を視察の爲め渡米せし事あり。當社の營業所は 20th floor of 15 east twenty-sixth street, N. Y. にありて此社の販賣する人造絹絲の製造元は

Viscosa di Pavia, Pavia,

Unione Italiana, Viscosa, Turin,

Unione Italiana Viscosa, Venaria,

Societa Italiana seta artificiale, Milan.

Societa seta artificiale di Padova, Padua,

にして即伊國「SNIA」會社の一手販賣店なり。

2. L. Erstein & Bros. 345 Fourth ave, N. Y.

M. Denis 氏の白國オーブルグなる人造絹絲製造會社の一手販賣所なり。

3. Genral Silk Yarn exchange. 39 West 24th, street, N. Y.

4. Lutwig Littauer Co., Incor. 30—38 East 33rd street, N. Y.

和蘭人造絹絲製造會社の一手販賣所なり。

5. H. S. Meritzer. 303 fifth avenue, N. Y.

6. George Ellbogen & Co. Inc. Second Floor of 443 Fourth avenue, Corner of thirtieth street, N. Y.

7. Berizzi Bros. Co. 15 East 26th street, New York.

8. A. Facchetti-Guiglia, 170. Broadway, N. Y.

9. F.A. Straus and Co. 451—453 fourth avenue, New York.

10. Stefano Berizzi Co, Inc. 45 East 17th street, N. Y.

11. H. Ray Paige & Co. Inc. 1. Madison avenue N. Y.

英國及び伊國産人造絹絲のみを取扱ふ。

12. Mindlin & Rosenman. 105—107 East 29th Street, N. Y.

13 Nathan Weiner & Co. 19 West 36th Street N. Y.

纖維染色業者として習熟せる獨逸 Fuerstenberg, Mecklenburg の W. Rexvoth 氏の發明にかゝる人造絹屑と羊毛とを混紡して作りたる「Vistra fibre」製品の一手販賣所なり。

14. Walter Leon Hess, Incorporated. 44 East 23rd Street, New York.

以上の多くは蠶絹絲と共に人造絹絲を取扱ふものにして人造絹絲のみを取扱ふもの殆んどなく時に羊毛又は棉絲と共に之れを取扱ふものあり。  
又人造絹絲の加工業者はニュージャージー州に最も多くして之れ又人造絹絲のみを取扱ふもの甚だ少く多くは蠶絹を取扱ふと共に之れを取扱ふものにして今次に其二三工場を示さん。

1. Henshall Bros. Silk finishing Co.

蠶絹絲及人造絹絲の染色をなし約八〇〇〇平方呎の床面を有する工場ありて Cedar street, Paterson に位置し其仕上工場は Fifth & Railroad Avenue にあり。

2. E. Richard Meining Co.

人造絹絲羊毛蠶絹絲の各 Jersey を作る新舊工場共に Reading, Pa. にあり。

3. Silk Producer's Corporation.

人造絹絲併に他繊維の織物製造資金一〇萬弗工場は Dover, Del にあり。

4. Viscose Corp. of Virginia, Roanoke, Va.

人造絹絲を以てする各種雜貨及び織物製造業

社長 Dr. C. A. Ernst. Riley Park, Pa.; 主記 Charles H. Hendrickson, Philadelphia; 主記 Whitewell W. Coxe. Roanoke Va.; 主記 Joseph H. Chitwood, Roanoke, Va.; 主記 Frank W. Rogers. Roanoke.

5. The artificial Silk finishing Co. Do ver. Del.

人造絹絲仕上業資金一五萬弗

6. Textile throwing Co. Hawthorne, N. J.

人造絹絲撚絲業

7. Frank F. Pels Co.

蠶絹絲棉絲と共に人造絹絲の染色及び撚絲をなす。

營業所 17, East 24th, Street, N. Y.

工場 New Durham, N. J.

Beacon, N. Y.

New York N. Y.

8. Columbia Silk dyeing Co.

- 1726-30 N. Howard street Philadelphia, Pa.  
 人造絹絲染色業
9. Charles Stuermann. 66—68.  
 Hancock avenue, Jersey Cit. N. J.  
 人造絹絲染色業
10. Summit Dyeing Co.  
 517—519 Elm street west hoboken, N. J.  
 綿絲布と共に人造絹絲の染色を成す。
11. Rentrop Silk Dyeing Corporation.  
 99—113 Raymond street, Brooklyn, N. Y.  
 蠶絹と共に人造絹絲の染色をなす。  
 以前 W. M. Teschemachen, Co. と稱せり。
12. American Silk & Cotton Skein Printing, Co. Inc. 440—450 East 22nd st Paterson, N. J.  
 蠶絹絲及び綿布の捺染及び人造絹絲の染色業

13. Scientific textile, Co.  
 Morvise ville Pa. Bucks Co.  
 各種纖維と共に人造絹絲の精練漂白卷返業
14. Senor and Wer Thim, Inc. 162, West. 23. r1 st, & 13—15 West. 20 d. st. New York.  
 染色撚絲殊にKnit用絲撚絲をなす。
15. Oswalt Lever Co. Eleventh & Cambria st, Philadel alu. a. Pa.  
 莫大小用絲撚絲
- 此國人造絹絲製造用機械は殆んど凡て英、獨、佛、伊、白等の各國より輸入され未だ此國に於て此種機械の良好なるものを製作する工場なく撚絲、合絲等の機械製作には熟練せるものあれども人造絹絲に特に適當するものを作る者甚だ少し。
1. Scranton Silk Machine Co, Scranton, Pa.  
 撚絲機械製造に熟練し人造絹絲其の他の卷返し機、合絲機の良好なるものを製作し尙壓搾荷作機をも作る。
2. Franklin Machine Co, Providence, R. I.  
 絹絲紡績機械と共に人造絹絲用撚絲機械製作、

(部東) 國衆合米北



説概業工絲絹造人近最

【地圖解説】

米 國

- (1) マーカスフック || 米國ビスコース會社工場
- (2) レウイストン || 米國ビスコース會社工場
- (3) ロアノーク || 米國ビスコース會社工場
- (4) パフアロー || デュボン織絹製造會社工場
- (5) クリーブランド || 米國織維製造會社工場  
|| 織維工業會社工場
- (6) ドバー || スウスホルビスク會社工場  
|| アクメ人造絹絲會社工場
- (7) マサチユースツ || セルストロ織維絹絲會社工場
- (8) ノクスビル || 米國織維素藥品會社人絹工場
- (9) ファイヤルファイヤ || キュプローズ會社工場
- (10) ホーソーン || 米國織維製品會社工場
- (11) スプリングフィールド || アルバートゲツダ、メイン商會人絹工場
- (12) チェスター || 織維素絹絲製造會社工場
- (13) アセニア || キュブラ絹絲會社工場
- (14) ニュキヤッスル || ニュキヤッスルシツクラブ工場
- (15) バターソン || ニトラ製品會社工場



欠

月次	作業日数	直接従業人員	生産高(封度)	生産原價(對一封度)
11	二八	三・四四二	六・三九五	三・六一三
10	二七	三・四六〇	五・九二九	四・〇一八
9	二八	二・八七二	三・八九六	六・〇七四
8	二七	二・〇二一	二・〇五〇	五・九六四
7	二九	三・〇三五	三・六四〇	四・八七四
6	二八	五・一〇七	六・一四〇	四・二五八
5	二九	六・四〇六	八・九一七	四・二五七
4	二六	五・五六九	七・九〇七	四・一七一
3	二九	六・七七九	九・八七八	四・三七四
2	二六	六・二七七	七・五七三	五・〇〇二
1	二七	五・九〇一	五・二五五	五・一四七

し廣島工場に於ては主に一五〇デニールを作る事を目的として久村氏主任となり現時一日約一〇〇〇封度を産すれども完成の上は約二〇〇〇封度の生産能力を具有する筈なり。

今次に米澤工場に於ける大正九年度各月の生産高及生産原價を示さんに

# 欠

平均	12	二八	三・四一七	五・七五六	四・〇〇五
		二七・六	四・五二五	六・一一一	四・六四六

同年春頃迄では 況好況氣にして生産を漸次増加したりしも俄然襲來せし財界の激變は此需要をして激減せしめ七八九月の三ヶ月間は製産制限の止むなきに到り爲に生産費に増嵩を來し、上表の如き平均原價となれるも翌年春頃には一封度當千圓位に低下するを得たりと云へ、當社は世界最優の評ある英國コールトールド會社の製品に倣はんとして努力し遠心式紡絲機械に依りて製造しつゝありて其の最近の製品は歐米の夫れに比し殆んど遜色なく甚だ優良なるものを産し其の大部分は國內需要に充てられ残額は支那、印度、南洋方面に輸出せらる殊に最近人造絹絲業界に有名なる斯の英人「ドリーバ」(William P. Dreaper)氏と結合し同氏の東洋に於ける特許權を全部獲得し尙將來同氏を先導として事業の改發を圖る筈なれば當社の前途又甚だ多望なり又當社久村氏は昨夏來英國に渡り種々研究し本年八月歸朝直ちに廣島工場の改良に専心しつゝあり。

當社幹部は前記二氏の外に社長鈴木岩藏、専務佐藤法潤及松島誠の諸氏あり最初資金を百萬圓とせしも其の金額を拂込みたるは本年四月にして實際消費せる金額は裕に一五〇萬圓を超へ尙事業擴張の爲本年五月、年九分の利率を以て一〇萬圓の社債を募れり。

當社本部は大阪府西成郡神島村東工業株式會社内におり支店を東京市本所松倉町に置き主として製品の販賣に當らしめ工場は前記二個所に有れども米澤工場は擴張の餘地なきが故に更に第三工場を越後直江津に建設の計劃中なりと云ふ。

## 2. 日本人造絹絲株式會社

大正六年六月資金五〇萬圓を以つて創立し東洋人造絹絲會社の前身より特許權を譲受け横濱市子安町に工場を建て中島朝次郎氏以下技術者全部此の工場に移りて銅アンモニア法に依り操業を開始し其の後製造經營に苦辛したりしも良好の結果を得ず先に東洋人造絹絲會社より來りし技術者等も同社工場の再開に際し當社を辭して舊工場に歸り中島氏のみ残りて製造に努力したりが後幾何も

なくして同氏も退きしかば従来營業部主任たりし櫻内辰郎氏は技術部主任を兼ね其の操業を續け大戰に依る此種物資の缺乏は需要甚だ大となり生産能力を擴大し更に三重縣津市に分工場を建て横濱工場にては一日約二〇〇封度を津工場にては約三〇〇封度を生産せり然れ共此津工場は當社分工場とは只表面の名義のみにして經營は全然別種獨立にして岡合名會社之れを經營し技術者は全部横濱工場より派遣し其の收利を横濱工場と折半するの條件なり故に當社資金は創立の當初五〇萬圓全部を拂込みて操業したりしも大正八年二月之れを四〇萬圓に減資し同年八月之れに一六〇萬圓(新株一株につき一二、五〇圓拂込)を増資して二〇〇萬となし兩工場の操業をなしたりしも財界の不況と共に收支良ろしからず遂に大正十年十月一〇〇萬圓に減資したり(舊株八〇〇〇、五〇圓拂込新株一二〇〇〇、一二、五〇圓、一五萬圓計五五萬圓實際拂込む)。

當社は伊藤濱次郎氏創立以來社長にて井上角五郎、越山太刀三郎、岡半右衛門の諸氏之れが重役たり。

尙中島人造絹絲製造所と稱して「ビスコース」法の研究中なりし中島氏は再び當

社に入りて其研究を續けたれども未だ大規模装置に依りて有利なる製造をなすに到らず現下當社兩工場共に休業せり。

### 3 東洋人造絹絲株式會社

日本最初の人造絹絲工場にして其の初め會社組織となさざる時代の經營状態不詳なれども工場を伊勢松坂に建て中島朝次郎氏技術主任となり銅アンモニア法に依り操業したりしも創業後幾何なくして其の特許權を約二萬圓にて前述の如く日本人造絹絲會社へ譲渡し技術者の全部も夫れに移りて一時工場を閉鎖したりしが後約一年を経たる大正七年七月東洋人造絹絲合資會社を組織し技術出資五〇〇〇圓、機械出資五〇〇〇圓、現金出資四萬圓計五萬圓の資金を以つて初めて會社組織にして營業を始めんとするや先に横濱に到りし技術者中野口氏父子は再び松坂に歸り之れが製造に従事せり。

其の後戦時中の好況に際し之れを株式組織に改めんとし大正八年十二月合資會社を解散し同時に資金七萬五千圓(全額拂込)を以つて株式會社となし其の操業を繼續し一日約五〇封度を産せしも資金の缺乏に依りてか或は製造法の未だ完

全ならざるに依りてか其の事業を時々休止し現時又休業中にある。

當社は合資會社時代より浦田貞次郎氏社長となり其の經營の任に當り本店を三重縣飯南郡松坂町大字黒田町に置き東京市日本橋區青物町及び大阪市北區壺屋町二丁目目支店を設置せり。

#### 4. 富士人造絹絲株式會社

資金一〇〇萬圓(七五萬圓拂込)を以て大正八年創立せられ社長に錢高作太郎氏専務に千代浦昌氏就任し本社を東京に置き工場を滋賀縣滋賀郡石山村に建設し落綿を原料として銅アンモニア式新法に依り操業せんとし新法の發明者たる永石藤十郎氏は技師長となり製造技術の指導監督をなせしが操業開始後幾何もなくして氏は詐偽の告訴を受け遂に職を辭し其後當社は尙操業に苦辛したりしも成功の域に達せず其の製品を少しも市場に出さずして終に休業し工場を他種工業家に賣却して解散せり。

#### 5. 旭絹織株式會社

當社は其の昔旭人造絹絲株式會社と稱し資本金一〇〇萬圓を以て大正八年八

月創立せられ工場を滋賀縣膳所町に建設し朝比奈晃十氏の考案になる「ビスコー」法に依り操業し社長に伊藤長兵衛氏専務に田村順吉氏就任其の經營に苦辛し一方發明者たる朝比奈工學士は技師長となりて之れが製造に努力し製品僅に市場に送るに到しも財界變動の打撃を蒙り早くも資金に缺乏を來して組織變更の止むなきに到り喜多又藏氏社長に上島五一郎氏及び田村順吉氏主として之が經營の任に當り製品を市場に送りしも品質甚だ良好ならず加ふるに生産原價に比較的多額を要したれば寧ろ歐米先進國の導に依るを可なりとし之れと交渉せんとせしに幸ひ前記上島氏は數年彼地にありて斯業を詳細に調査考究せしが故に同氏は之れが任務を帯びて渡歐せり時恰も日本窒素肥料會社の野口遵氏は人造絹絲工業の企劃を思ひ立ちしが喜多氏の此企圖あるを知るや之れと協議の結果企業を共にする事となり同氏は同社の用件を帯びて渡歐し上島氏と共に歐州各國の斯業を視察考查し最も優秀なる經營に依り最優良なる製品を出せる獨國エルバークエルドなる聯合光澤絲製造會社と交渉し特許權の譲り受と技術指導とを約し舊法を捨て、全然此の新法に依る事とせり。

然れども種々の事情其の間に伏在し旭人造絹絲會社は一先解散し一方旭絹織會社を新設して前者を買収し其新營業を行ふ事となり大正十一年五月二〇〇萬圓の資金を以つて當社を創立し本社を大阪西區江戸堀南通二丁目に置き琵琶湖岸の舊工場を改増築する事に決し今や着々進捗中なり。

當工場完成の上は一日一〇〇〇疋を生産する可くエルバーフェルド式に依り八〇—一五〇デニールを製造し殊に單絲一五—三デニールの細織絲をも製造する筈なれば之れに依り本邦人造絹絲業の面目一新するに到るべし。

現下當社幹部は喜多又藏氏(社長)野口遵氏(専務)上畠五一郎氏(常務)田村順吉氏(常務)の諸氏なり。

#### 6. 東京人造絹絲製造所

大正八年暮創立の豫定にて株式募集中なりしも結果思はしからず創立發起人の一員にして且主腦者たる藤掛與左衛門氏は歐米の法に依る可しとして機械購入及び技術者備聘の目的を以て獨國に渡り種々交渉し購入契約を結び又親ら斯業を研究調査して大正十年三月歸朝せり斯くて機械類は同年秋頃に既に到着し

工場の建設を急ぎ土地を神奈川縣松田町になして朝比奈晃十氏主として之れが設立の任に當り専門技術者として獨逸より本年春來任せるロポツシュ氏(Roposch)と共に本年四月建築に着手し着々其歩を進め來春早々操業を開始する筈なり。

其方法は「ビスコース」式にして機械の殆んど全部は獨國「ヘムニツ」(Chemnitz)より來り最新式のものにして藤掛氏の言ふが如くんば恐らく日本第一の良品を然も安價に得るに到る可く其規模は一日約一五〇封度(一日廿四時間作業)内外なれども操業の上成績だに良好ならば直ちに擴張の豫定なりと云ふ。

當所は個人經營ならば資金融通の法等詳かならざれども絲物商として有名な東京町田氏と前記藤掛氏との共同支辨に依るものゝ如く藤掛氏専ら之れが經營を統轄す。

#### 7. 帝國人造絹絲合資會社

京都府紀伊郡竹田村字中島にあり其昔大瀧新之助氏主となりて「ビスコース」法に依り人造絹絲製造の研究中なりしが大正八年五月高田吉郎氏外八名の諸氏之を讓受け氏等は二四〇〇〇圓(内六千圓は發明權出資)の資金を以つて合資會社を

組織し小規模に其製造を研究中なれども未だ製品の市場に出でたるを聞かず。

8. 人造絹絲工業株式會社

大正十年十一月笹沼源之助氏發起となり資本金二五萬圓(半額拂込)を以て設立し「ビスコース」法に依りて操業し本社を東京市麴町内幸町一丁目に置き工場は東京電氣工業會社の川越工場を使用し一日約四―五〇封度を産するに過ぎず。當社本年度上半期の利益七五四〇一圓を出し現時笹沼氏之れが社長たり。更に人造絹絲販賣及び輸入業者の主なるものを下に列舉せん。

1. 三井物産株式會社

東京市日本橋區駿河町、英國コールド會社製品の一手販賣をなし當社雜貨部にて之を取扱ふ。

2. 西田嘉兵衛商店(株式會社)

本店 東京市日本橋區横山町  
支店 京都市日暮通出水

主として帝國人造絹絲會社製品を扱ひ尙外國品をも販賣し本邦人造絹絲販賣業

者の白眉なり。

3. 藤井彦四郎商店

本店 京都市上京區智恵光院通中筋角  
支店 大阪市西區阿波座上通一丁目

東京市日本橋區新大坂町

主として日本人造絹絲會社製品を扱ひたりしも近時海外製品を主として販賣す。

4. 岡本龜太郎商店

京都市中立賣黒門東入

舶來品のみ扱ふ。

5. 株式會社藤掛商店

東京市日本橋通油町

6. 小山由藏商店

大坂市南久寶寺町二丁目

7. 合名會社旭商會

- 京都市西陣
8. 合名會社豊田商店  
大阪市東區高麗橋四丁目
9. 河池幾太郎商店  
京都市猪熊通丸太町南入
10. 青木常作商店(芳野屋)  
東京市日本橋區馬喰町一丁目
- 船來品のみを扱ふ。
11. ジイメル、ヘグナー、エンドコムパニー  
本店瑞西國チューリッヒ、タールストラッセ  
支店横濱市山下町
- 神戸市伊藤町
- 船來品販賣主として瑞西製品を扱ふ。
12. コルンス、エンドコムパニー

- 本店英國倫敦市グレート、ウインチエスター街  
支店神戸市海岸通  
横濱市山下町
- 船來品のみ取扱ふ。
13. 謙信洋行(經營者獨逸人)  
本店横濱市山下町
- 獨逸品を扱ひ戦前には其の最多量を取扱へり。
14. オット、ライメルス合名會社  
本店獨逸バーブルヒ、アンステルダム  
支店東京市有樂町一丁目三番地  
大阪備後町二丁目
- 元獨逸製品其他を取扱ひしも近時扱はざるものゝ如し。
15. ツエーリース、ウンド、コムパニー  
本店獨逸國漢堡市ミユンクベルグ街



支店 東京市築地三丁目

横濱市山下町

神戸市海岸通

獨逸品輸入販賣業者なりしも戦後は之れを扱はず。

16. カルローウキッツ、インド、コムバニー(合名會社)

本店 上海キユウキャンロード

支店 神戸市葺合磯上通二丁目

獨逸品を取扱ふ。

### 第一五章 雜

南米ブラジル、リオデヂャネイロ(Rio de Janeiro)に最近一大人造絹絲工場建設企劃の由なれども詳結不明。

瑞西政府は今迄で無税なりし人造絹絲に輸入税を課し從來の着色絹絲の輸入率と同様一疋につきニクロローネとせり(本年四月廿三日發布)西班牙政府は本年五

月燃絲せざる漂白人造絹絲の輸入税を一疋につき〇・五より三ペゼタンに上げた

り。  
次に最近著者が某所にて「最近の本邦人造絹絲工業」と題し講演せる大様を掲げんとす。

消費量の事に就ては申さず、之れは他日又機會を待ちて本日は現今本邦に如何なる人絹會社が計畫されつゝあるかを述べるのである。現在會社として製品を多少共も市場に出し居れる會社は次の如くである。

#### 一、帝國人造絹絲株式會社

資本金は五百萬圓で神戸の有名な巨商鈴木商店の經營に依るものにして實際に注込める資本金は一千萬圓に及ぶならん、之れは「ビスコース」法にて操業し紡絲機は遠心式を使用す、本邦としては三重縣の松坂にありたる東洋人絹會社と共に最初の工場である、今本邦最大の會社たるも技師長、久村、秦、兩氏の長年刻苦研究が生める賜である。

工場は山形縣米澤市館山町、廣島千田町、周防岩國の麻利布村の三個所にして現

在の生産高は一日に付米澤工場では一千五百封度、廣島工場では八千封度位である。岩國工場は新設建築中なるも、來年一杯には完成するとの由なれば、完成後は一日約四萬封度の人絹を作る相である。此社の製品は概して市場に定評あり、本邦生産高の六割餘を占めて居る。此の二、三年來、每期一割五分乃至二割の配當を續けて居る。尤も純利益は昨年下半期の決算の如きは五割二分と云ふ素晴しき勢である。此の會社の製造法は主として前記兩技師の研究より成れるが、又英、獨等から特許の買入れ、殊に英國人の渡來指導せし事もあり、英國式と稱し得る。或る報導に依れば、鈴木商店經營の事業中に於て、現今最も有利なる事業の一とされ、同商店は當社に大變なる力瘤を入れて居る由である。

## 二、旭絹織株式會社

此の會社は前に旭人造絹絲株式會社と稱し、歐洲大戰の好況時代に舊上田蠶絲専門學校教授にして當時大坂高等工業學校應用化學科科長たりし朝比奈晃十氏の研究を著者等が助け完成し創立せし會社である。其後間もなく襲來した財界の大逆轉に閉口し漸く息をつげる處、大阪の日本綿花の喜多又藏氏が經營を引き受

け(此社の初めは大阪丸紅商店其他江州系の人の經營)經營する事となり、殊に外國より特許を購入する事となり、會社も一旦解散の上新しく旭絹織會社を組織して獨逸國ブレライニグテグラントツフ會社と提携して實質は殆ど同社の分工場の如くせり、故に全部獨逸式である。製造法はビスコース式にて紡絲機はスプー形式である。資本金は四百萬圓なるが、近、一千五百萬圓に増資するとの事である。三菱系の日本窒素肥料會社と日本綿花會社との共同經營なるが、大體は日綿系と云ふ事が出来る。工場は滋賀縣膳所町に在り、一日約三千封度なるも、最近擴張工事の完成後は一萬封度に達するならん、尙最近九州延岡の近在に廣大の地面を買入れ、約三萬封度の工場を建設計畫中である。此社は實際の歴史は前述の如く古きも絹織會社となりてより、滿三年の下半期に於て既に一割二分の配當を行ひ、近く昨年下半年の配當が一割五分、純利益は資金に對し四割八分の巨額である。此の會社の事に就ては著者も昨年迄で居りし事より餘り詳細に渡る事を得ず。

## 三、三重人造絹絲株式會社

之はビスコース法にして純日本式を以て操業し、往年の日本人絹絲會社、津工場

の再興である。一日僅々百封度程の能力にして製品は餘り良好ならず従て利益も僅少なり。

#### 四、人造絹絲工業株式會社

前社と同じく純日本式のビスコース式にて操業す、工場は埼玉縣川越町に有り未だ製造販賣するに到らず今尙研究中の由なり。

#### 五、東京人造絹絲製造所

獨逸國より機械を輸入し獨人技師を備ひ獨逸式にて操業す、工場は神奈川縣松田に建設し町田藤掛兩氏の個人經營にて技師長として前述朝比奈氏が任に當れるも將に製品の市場に出んとするに到るも斯の震災にて潰れ其後機械に修理を加へ静岡縣加島村の近在に工場を新設中との由なり。

現在會社としては以上の如くなるも未だ操業に及ばざる新設計畫中の主なるは次の如し。

#### 一、日本レイヨン株式會社

當社は大日本紡績株式會社の分工場人絹製造部の如きものにして資本金は一千万圓、製造方法は獨逸式に依るなるべし、工場は京都府宇治町に建設中にして規模は當分二千封度なるも全工場完成の上は一萬封度に到らん、工場建築には既に着手し竣成を急げば來春には製品として市場に出する見込なり。

#### 二、東洋レイヨン株式會社

當社は三井物産會社の經營にて資本金二千萬圓なり、工場は滋賀縣膳所町と石山村とに跨れる地にして前記旭絹織會社とは東海道線を境界とし相對す、規模は當分の間は三千封度なるも完成後は二萬封度の由である、製造方法はビスコース式にして機械は獨逸式を主とし之れに英國式を加味するものならん。

#### 三、倉敷絹織會社

資本金は一千万圓にして倉敷紡績會社の分身である、工場や規模の事は未だ確定せざれ共も同會社重役は一名の技師を従へ昨年渡歐せり、之機械の購入及び指導者の交渉の爲ならん、日本技術者としては現下京都帝大應用化學科の福島教授の元にて養生中にして尙特別に京都市九條に藏王化學研究所と云ふ研究所を設

けビスコースの製造を研究中の由なり。

#### 四、東京人造絹絲株式會社

資本金二千萬圓にして創立者は富士製紙會社の大川田中藤山氏等と前記東京人造絹絲製造所の町田藤掛兩氏等が合同せるものなり、又富士製紙會社は川越の人造絹絲工業株式會社買收の噂もあれば是等兩舊會社の合併を以て更に新大會社とし海外より新式機械方法を購入製造を開始するものならん、尤も富士製紙會社としては原料バルブを製造供給の計畫あれば是非此種人造絹絲工場の經營は宿望なるべし、方法は勿論ビスコースである。

#### 五、東邦レイヨン株式會社

資本金二千萬圓にして京阪及び京濱、四國地方の財界有力者が寄つて經營する由である、製造法はビスコース法にて規模及び工場地は未定である。

#### 六、日本毛織株式會社經營

之れは未だ具體化せざるも昨年同社の命を受けて當時京都高等工業學校教授たりし堀内氏が同校辭職の上機械購入及び調査研究の爲め渡歐せり。

#### 七、東洋紡績株式會社經營

之も未だ確定せざるも創設に焦慮の様である、工場地としては既に滋賀縣堅田町に大なる地區を買收し居る由なり。

#### 八、鐘淵紡績株式會社經營

之も未定なるが最近人絹工場所として滋賀縣今津町に廣大なる地所を購入せりと傳へらる。

尙是等の外に計畫中のもの五、六は有るも皆一千萬圓の資本金を下らない、是等新設會社が製品を市場に出すは來年中頃より始まり大正十八年頃には全部出來れば大正拾九年よりは我國も世界有數の人絹生産國となる、之れに續て忽ち生産過剰となると世人は考るも未來の事故之れを明言得ざるも支那及び印度等の廣大なる販賣地を有し工費の安價と云ふ事に於て歐米の其れに優點を有する我國に於ては歐米も顧客とする事必ずしも不可能ならず、前記新設の工場を通覽するに多くは琵琶湖を離れず其の水を使用の計畫なるは注目に値する事である、之

# 欠

最近人造絹工業概説

れ人絹工場が水質と水量とに重大關係を有するに依るのである。

最 近  
人 造 絹 絲 工 業 概 説 終

未來は吾れ人共に之れを形成し行くもの然も現在より一步も前に出する能はざるは人智の常なるが故に予は本邦人造絹絲の將來を論ずを止め偏に斯業に係せるものは勿論將來之れに關與せんとする者の事業に忠實にして熱誠事に當られん事を之れ願ふのみ。

欠

昭和二年一月二日印刷  
昭和二年一月五日發行

最近人造絹絲工業概說  
【正價金三圓五十錢】

著 者 加 美 好 男

發 行 者 東 京 市 神 田 區 錦 町 一 丁 目 十 六 番 地  
周 防 初 次 郎

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 多 町 一 丁 目 九 番 地  
清 水 吉 之 助

印 刷 所 東 京 市 神 田 區 多 町 一 丁 目 九 番 地  
清 水 印 刷 所

發 兌 元

東 京 市 神 田 區 錦 町 一 丁 目 十 六 番 地

明 文 堂

電 話 神 田 二 八 六 〇 番  
振 替 東 京 一 三 一 九 〇 番

21722  
5.8



5866  
ka37

終